1356

新生命

020821-000-5

特18-178

新生命

アンドリウ・モーレー／著

M30

ABI-0647

178/178

THE NEW LIFE
BY
REV. ANDREW MURRAY.

新生命

アンドリウ、モーレー著
坂田徳明譯

東京 教文館

序

アンドリユー、モーレー氏の潔めに關する書籍は久しく英國に於て聲譽を博し好んで愛讀せられしものにして恐くは實驗宗教に關する許多の著者の中最も多數の讀者を有するならん一昨年氏が英國に至りて開きし集會の如きはキリストの全教會の上に甚だ大なる祝福を與へたり

余は此書が日本を祝福すること大なるを信ず　此國

に於て信仰の保證を求め進んで聖靈の恩賜を希ぶ者
尠からず余は此書が斯る人々に對して最も適切なる
神の消息となりキリストの福音の全き恩惠に導き到
らんことを祈る

千八百九十七年二月

雲州松江に於て

バークレー、エフ、バックストン

翻譯者之序

曾て我國に主の使命を奉じ今や英國へ歸省せられし
ゼー、エス、トンプソン孃より此書の英譯せられし一部
を惠與せられ熟讀玩味余の心靈を益せしこと尠から
ざりき。而して此度バックストン教師の勸誘によりて
大膽にも翻譯して主にある兄姉諸君に紹介せんと欲
するに至れり、然りと雖も余は文筆の技に拙く原著者
に對し讀者諸君に對し余の任重くして力足らざるを

悲めり、讀者諸君譯者の不文を咎ること無く余の受し恩惠を諸君に分んと欲する微衷を空ふすることなくんば幸甚。

此書を出版するに當り、敎友武本喜代藏君は校閲の勞を惜むことなく文意の解し難き所を訂正せられ、敎師バックストン氏は自ら出版の資を投ぜられたり、玆に二氏の功を識るして讀者諸君に告ぐること爾り。

明治卅年二月　出雲國今市町に於て　堀田達治　謹記

新生命　原著者之序

余は弱年の信徒諸君と交るに當り、新生命に就て彼等に欠く可らざる敎訓を簡短明晰に記述せる適當の書籍の必要を感することと屢次なりき、而も余は恰も我望に應する書籍を發見する能はざりき。而るに千八百八十四年降誕後第七日より余に與へられし働を務むるに際し、既に主を信ずることを公言せりと雖、未だ信仰も智識も甚微弱幼稚なる人々と專ら相語る機會を得、

余が此の欠乏を感ずる念を益切ならしめたり。此に於てか余は旅行中遂に自ら筆を執るの止むを得ざるを感じぬ。余や弱年の信徒諸君と相語りし談話に由りて、彼等は一般新生命に對して極めて薄弱なる思想と謬りたる見解を抱き、常に苦心せることを深く感得せしが故に、即ち此の人々に對して主イエスの中には如何斗り能力と喜樂の榮光ある生命彼等のために備へられたるかを識らしめ、又此の凡ての幸福を受くるの途如何に平易なるかを示し、次て聊か彼等の教訓ともなし、奬勵ともなさんことを切望するに至れり。

余は之を爲すに當り先づ最も必要なる或題目を撰定し此に由て余の考察すべき範圍を制限せんことを欲せり。即ち第一に神の言なり、是榮光ある確實なる嚮導者にして僅に身を之に任せしばかりなる極めて單純の人に取りても又然りとす。次には神の言の至要の要素にして吾人の爲に凡をなし給ふ父の賜物なる御子

是なり。是に次ぎては罪惡に就て聖書の教ふる所是なり、蓋し罪惡は吾人がイエスの御許に奉呈すべき唯一のものにして、又イエスに奉呈せざるべからざるもの、又イエスによりて釋さるべきものとす。此外尚ほ進んて信仰あり、信仰は吾人微力にして何物も奉呈すべきものなく何事をも爲す能はざる者なるを顯はす一大文字にして、且又吾人の救濟は吾人の此世にある限り日々神より授けらるゝ賜物として受けざるべからざ

るを吾人に教ふる文字也。次に又聖靈も弱年の信徒の知らざるべからざるもの、是人格を具ふるものにて神の言も主イエスも又其の働も吾人の之を信ずる信仰も皆聖靈に由て眞實となり能力となるなり、其次には從順にして多實なる聖き生涯にして是れ聖靈の吾人に教へて歩ましむる者なり。余は已上の如く新生命に關して余の所論を六ッの主要なる思想に制限せり、而して余の記述する所は神之を用ゐ、弱年の信徒諸君が

其天父より享有せし生命は何如に榮光あり且つ能力ある者なるかを知らしめ給はんとを不斷神に祈り奉れり。余は弱年の改宗者を信仰の友なく、教化の師長もなく、說教を聽くの機會もなき寂寞無聊の地に殘さゞるの止を得さると往々これありき、而して神が余に書かしめ給ひし此書は正しく斯る境遇にある許多の信徒を益せんと是我確信なり、是我希望なり。

又余は此書を記述するに當り右の外に亦別に一の希望ありたり、即ち余が此の小著述は、讀者の注意を神の言より隔離せしむることなく、反て一層神の言を貴からしむるものなれかしと懇願せり、此に於てか余は各論旨の要點に對し神の言を篇頭に引照し、次て讀者をして猶進んで神の言即ち神御自身に耳を傾くる念を奮起せしむる用意を整ふるに決心せり。

余は如斯編輯の組織の二重の利益を生すべきを望むものなり、世には聖書を學ふに適當なる方法を辨へず、

又誰にも教訓を得る能はざる者尠からず、此書は斯る寂寞の境遇にある信徒を益するならん。讀者若し一二の論點を沈思默想なし、而る後ち引照せる聖語を繙讀せば、是よりして己が識らんと欲する神の言を考究熟慮するの緒を得べし。然かのみならず、又祈禱會或は聖書研究會の用に供することを得べし、即ち其の宿題として定めし所を自宅に於て一讀せしめ、尚ほ大切と認めし聖語を能く〳〵研究せしめよ、而して會の當日司

會者一應其の一章を朗讀し、此を題となし、會衆をして隨意に己が最も感したる點に就て各聖語を引擧せしむべし。

如此豫告したる點に關して互に聖語を引擧し朗讀せしむることの益甚だ大なるとは余が會衆に於て實驗上發見する處なり、斯る仕方は人に聖書研究の念を起さしむると、往々にして說教にも勝るとすら是れあり、是れ會衆各自を鼓舞し、殊に弱年の信徒をして自己の

見識に由り神の言を研究せんとする精神を起さしむ、亦キリストの肢體たる信徒相互の間に一層活潑々の交通あるを得せしめ、而して愛に於て互に相樹立せんとの念あらしむ、又神の言は神の思想の活通信なるを認めしめ神の力に由り我等の裏に聖旨にかなふをを爲し遂ぐるものなるを悟らしむる緒となならん。余は信ず、多くの信男信女にして、主の爲めに何をかなし得べきかとて苦慮する人の是れあるべきことを。斯る人々

以上の如き方法を以てせば大に他人を祝福することを得ん、即ち已が二三の隣人か或は朋友を誘ひ來り、豫め已の研究に研究を盡せし聖語を讀きかすべし、左すれば斯る働の上に其の祝福を與へ給ふ可し。

尚ほ余は獨閑居して此書を用ふることに關し、一言する所あらんと欲す、乞ふ何人も之を恠とする勿れ、即ち各章少くとも三回熟讀せられんこと是なり、吾人が神に屬せるとを談ずるに就ての一大通患は其皮相淺薄

なるとにあり、吾人何事をか一讀し、幾分か之を理解する時は、即ち忽ち之を以て足れりとす、是れ甚だ然るべからず、吾人は充分の時を費し、以て深く之を肺肝に銘し、其感化を蒙らざる可らず。先づ第一回に於ては熟讀玩味、書中の善所を諒解し、且つ能く此文中にあるとにより益を受けたりや否やを自省すべし。而して第二回には眞に其の神の言と一致せるや否やを究め、引照せる聖語をよし全躰ならざるまでも、其一二を撰拔し、神

の其點に就て語り給ふ意味を充分に感得するまで沈思默想せよ、即ち神をして己れと己れの聖旨に就て我思意せざる可らざると、我信せざるべからざるとを其聖語もて教誨せしめよ。更に第三回に於ては書中記載する所と諸君の生涯と一致符合せる箇所あるや否やを顧るべし、是れ即ち過去に於ける諸君の生活が『新生命』と相一致せるものなりしや否やを識り、將來に於ては全然神の言に從ひて此世を送る方針を取らしめん

が爲めなり。余は堅く信ず、如此時間と勞力を惜むことなく、本書若しくは他の聖書研究上諸君を益する書籍の教示に從ひて、神の言を講究せば、即ち十倍の報酬を受くべきとを。

終に臨み、去歳互に交を結び、貴き救主と其の榮光ある救濟に就て相語らひし凡の兄弟姉妹、併に先般主イエスを己が贖主と認めし他の全會衆諸君に懇篤なる兄弟の愛を贈る、余は平和と愛に滿てる心を以て諸君を思ひ、諸君の衷に主の働の益堅ふせられんことを祈る、

余は諸君に向ひ、諸君の衷なる『新生命』の幸福と能力は諸君の識る所よりも遙に大にして驚くべく大なることを幾度反覆するも毫も倦怠を感することなし、諸君願はくは神の言なる聖書と、神の賜物なるイエスを知りて誤まるとなく、信じて疑ふなかれ、諸君願はくは主をして諸君と語り諸君の衷にはたらき得る充分の時を之に與へよ、左すれば諸君の心、神の祝福もて溢るべ

し。

我等の祈願と思念に超たるはたらきを爲し給ふ主に、榮光永遠にあらんことを。

千八百八十五年八月十二日

ウエリントンに於て

アンドリユー、モーレー

新生命

目次

第一章　新生命……一
第二章　神の言――眞の乳……十
第三章　吾人の心の中なる神の道……二十一
第四章　信仰……三十
第五章　神の道の能力……四十
第六章　神の賜なるキリスト……五十一
第七章　耶蘇の捨己……六十

第八章　神の諸子……六十八
第九章　イエスに對する吾人の捨己……七十七
第十章　罪の救主……八十六
第十一章　罪の告白……九十五
第十二章　罪の赦……百三
第十三章　罪の潔め……百十一
第十四章　聖潔……百十九
第十五章　正義……百二十九
第十六章　愛……百三十八
第十七章　謙遜……百四十八

第十八章　躓礙……百五十八
第十九章　保護者たるイエス……百六十五
第二十章　能と弱きと……百七十五
第廿一章　感情の生涯……百八十四
第廿二章　聖靈……百九十三
第廿三章　聖靈の嚮導……二百三
第廿四章　聖靈を憂へしむる勿れ……二百十三
第廿五章　肉と靈……二百二十三
第廿六章　信仰の生涯……二百三十七
第廿七章　悪魔の力……二百四十五

第廿八章　信徒の衝突……二百五十六
第廿九章　福祉の基となる可し……二百六十六
第三十章　個人傳道……二百七十五
第卅一章　傳道事業……二百八十六
第卅二章　光明と喜樂……二百九十八
第卅三章　懲治……三百八
第卅四章　祈禱……三百十九
第卅五章　祈禱會……三百二十九
第卅六章　エホバを畏るゝ事……三百三十九
第卅七章　全き献身……三百四十九

第卅八章　信仰の保證……三百六十一
第卅九章　イエスに倣ふ事……三百七十一
第四十章　此世に倣ふ事……三百八十二
第四十一章　主日……三百九十二
第四十二章　洗禮……四百四
第四十三章　聖餐……四百十五
第四十四章　從順……四百二十五
第四十五章　神の聖旨……四百三十五
第四十六章　克己……四百四十五
第四十七章　謹愼……四百五十七

第四十八章　金錢……四百六十六
第四十九章　基督信徒の自由……四百七十六
第五十章　成長……四百八十八
第五十一章　聖書の研究……四百九十七
第五十二章　完成者なるエホバ……五百十三

新生命

第一章　新生命

『それ神はその生命へる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずる者に亡ぶこと無して永生を受しめんが爲なり』――約三、〇十六

『夫れ爾曾は死し者にて其命はキリストと偕に神の中に藏れ在なり』――四三、四

○三、四

『此生命すなわち人の光なり』――たれば我儕之を見て證をなす即ち原父と偕に在し者に我儕に顯れたる窮なき所の此生命を爾曾に傳ふ神は窮なき生をもて我儕に賜ふ此生命は乃ち其子にあり神の子なもつ者は生を有つ』――約章一〇、二、同五、〇十一、十二

以上掲載せし聖語に由て之を見る時は、主イエスを信ずるものゝ受くる幸福は如何に光榮なることぞ。凡そ主イエスを信するものは其性質と品行に變化を來すのみならず、又天外の神よりして全然新しき生命を受くるなり。されば此人は新たに生れたるなり、神に由て生れたるなり。然り此人は死より生に移りたるなり(イ)。

此の新しき生命は即ち究なき生命に外ならず(ロ)。究なき生命といへばとて世人の多く想像する如く、吾人の生命今より後復た死滅するなく、却て永遠に存續すべしとの謂ひにたあらず。然り永遠の生命とは神の生命其ものに外ならず、其の永遠の昔より所有し給ひし生命に外ならず。抑も亦有形的にキリストに顯現したる生命に外ならず。此生命は

イ　約一、十二、十三、同五、七、廿、三、十
ロ　約三、十五、十六、十六、同一、三、四、五、十、約壹一、十四、同十、十五、十四

今や神の子たるものには何人にも惜みなく賜はんとするなり(ハ)。此の生命は無限の力ある生命なり。神の植物若しくは動物に生命を賦與し給ふや、其生命は即ち其内にありて生長の力を有し、之に由りて植物若しくは動物は己が力を以てするが如くに育成すべし。生命は力なり。而して新しき生命即ち諸君の心に在る生命には正しく永久朽ちざるの力ありて存す(ニ)。されば眞實此の新しき生命の作用に己れを委ねたる神の子は、其生長發達すると、禽獸草木の健全なる發達を遂ぐるよりも一層慥かなりとす。

然るに此の新しき精神的生命の力と、亦之を受くることを妨碍する者主として二事あり。一は其の性質と其法則と其の作用とを辨へざると

ハ　廿五、羅、廿六、廿六、十、二、同八、廿二、約壹五、十、三、約壹一、十、三、同三、一、同一、五、十、廿、十八、約壹十、廿九、十、來七、十、同十、廿五、廿一、十、六、廿、九、十、廿五、廿後、六、哥後、十二、九、同十、三、四、三、三、四、四、腓四、十、三、
ニ　約壹十、廿八、約壹十、廿九、十、來七、十、同十、廿五、廿一、十、六、廿、九、十、廿五、廿後、六、哥後、十二、九、同十、三、四、三、三、四、四、腓四、十、三、

*書三、四十八、三十六、九、五、〇、廿太、〇賽五、〇

是れなり。神より來る新しき生命てふ思想は、信者と信者たらざるとを問はず、たとひ分釐と雖も初めより之を有するものにはあらず。是れ人の思想に超越せるものなればなり。人の神に事へ、神を喜ばし奉らんとするや己れの所行、己れの人物を以てせんとす。是れ抑も誤れり。然るに此の妄想の根底極めて深く、己れは神の言を了解し、亦之を受くるものと思ひながらも、神の事を考ふるに或は人類的に考へ、或は肉慾的に考ふる風を脱せず。誠に是非もなき次第なり(ホ)。されば神は獨り救濟と永生とを與へ給ふのみならず、亦其の與へ給ふものを我等に了解せしむるため、聖靈を與へざるべからず。獨りカナンの地を指示し給ふのみならず、亦之れに到るべき途をも指示し給はざるべからず。亦吾人は普者の如くにして日々神より相せられざるべからず。此故に弱年なる信者は、自ら努めて己れ全く新しき生命の何ものなるやを知らざるとを確信し、且つ之を正確に思量するの力なきを確信せざるべからず。果して然らんには、必ず柔和となるべく必ず小兒の如く他の教へに從順するものとなるべく、此に至りて主は初めて其の秘密を開示し給ふべきなり(ヘ)。

詩廿五、〇、八、同百、〇、九、四十三、〇、十、三、八、〇、三十四、同四十、〇、十六、太十四、〇、廿五、一、前廿、十、〇、八、十、十四、〇、九、十四、〇

其次の妨碍は信仰の途に於て存す。凡ての植物、凡ての動物、凡ての小兒の生命の中には、それを長大ならしむるたけの充分の力ありて伏在す。今も亦然り、神は新しき生命の中に充分の力の最も光榮ある準備をなさせ給ひ、之に由り能く其子をして生長せざるべからざるたけの生長

同七、十二、一〇
二、十一、一〇
八來、十一、一〇
時十二、十一、一〇
同八、十二、一〇
同七、十一、一〇
同三、十一、一〇
同二、十一、一〇
約四、十一、一〇
八、十一、一〇
四、十一、一〇
哈四、一廿、一〇
太六、一廿、一〇
羅七、一廿、一〇
加七、一廿、一〇
來八、一廿、一〇

を遂げしめ給ふ。而してキリストこそは即ち此の生命なれ、又此の生命の力なれ(ト)。然れども心の偉大なる生命は眼以て見るべからず、手以て觸るべからず、只人類の尪弱の中に活動するものなるが故に弱年なる信者は、往々疑ひを抱くに至る、斯くて後には神の力に由り、確かに成長するとをさへ信ぜざるに至り、信仰の生涯とは目未だ之を見ず、手未だ之に觸れず、足未だ之を踏まざれども、而かもキリストに在る生命は即ち我が生命なることを信ずる其の生涯をいふものなるを解せざるなり(チ)。

果して然らば、此の生命を受けしものは、皆宜しく此の大確信を、脩養せよ。是れ永遠の生命にして我等の裏に働くものなり、是れ神の力と、偕に働くものなり、我に此生命あれば、我は即ち神の望ませ給ふ者と成るを得べく、亦必ず成らん。

キリストは我生命なり、我は日々神より我に與へさせ給ふ我生命としてキリストを受けざるべからず、若し之を受けなばキリストは圓滿に我が生命たるべきなり。

我に生命を與へ給はんが爲めに御子を授け給ひし父なる神よ、今我裏に榮光ある新しき生命あることを感謝し奉る　願はくは我を教へて此生命を眞實に智らしめ給へ　我思念は邪にして主に仕ふる道を知らず　我裏なる新しき生命には神の能力あることゝ我生命なる主イエスは此生命に歩むべき道を聖靈に由て教へ給ふことを信じ奉る

アーメン

さて讀者は左の諸項を其心の中に能く思ひ、能く玩味せざるべからず。

一、諸君が今信仰に由て享けたる生命は永遠の生命なり、神の生命なり。

二、此新しき生命はキリストの裏にあり而して聖靈はキリストの裏にあり凡てのものを諸君に供給すとて諸君の中にあり。キリストは聖靈に由りて諸君の裏に住給ふなり。

三、此の生命は驚くべき能力ある生命なり諸君はたゞひ己れの弱きを感ずるとあればとて、諸君は其の中なる生命の異能大權を信ぜざるべからず。

四、此の生命が諸君の裏に生長し、全く諸君を領有するに至るまでには、多少の時日を必要とす、されば暫ちく之に貸すに時日を以てせよ、必ずや增大すべきなり。

五、此の新しき生命の法律規則は一切皆人間の思をもて神を喜ばせんとするの方法とは全く相反するとを忘るゝなかれ。されば恐れても恐るべきは、我が心の思ひなり、宜しく諸君の生命にして亦諸君の智慧たるキリストをして諸君が萬事の教道者たらしめよ。

第二章　神の言——眞の乳

『今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ眞乳を慕ふべし此に由て爾曹長て救に至らん』——彼前二〇二

親愛なる弱年信徒よ右の聖語に由て天父の敎へ給はんとする敎訓を聞け。諸君の主を信ずるは日尙ほ淺しと雖既に己れを主の聖手に委ね、且つ主我を受け納れ給へりと信じたり。斯くして諸君は神より新しき生命を受けられたれば、今や恰かも新に生れし嬰兒に均し。されば神は前掲の聖語に由り諸君の生長發達に欠くべからざるものを指示せんとはし給ふなり。

彼前二一、二〇
同二十三、二十、二十五

第一點は是なり、即ち諸君は己れの神の子なるとを知らざるべからず。諸君ペテロが改悔後幾程もなき新進なる信徒に對し極めて明晰に言ひ渡せし言を聞け(イ)、曰く『爾曹は今再び生れたるなり』又曰く、『爾曹は今生れし嬰兒なり、』又曰く、『爾曹は今歸れり』又曰く『爾曹は今神の民となる』と。されば信者は如何ほど幼稚に、如何ほど薄弱なるにもせよ、先づ己れの神の子たるを知らざるべからず。斯くてこそ初めて我は進歩すべきものなりと自信するの勇氣も出で、又聖語の中に豫備し給ひつる嬰兒の糧を食用するの膽力も生ずるなれ。聖書は其始終を通じて吾人に敎へ給ふ、人は皆神の子たるとを知らざるべからず、而して亦之を知ると

を得るものなりと(ロ)。此の信仰の確定は、益し主にありて、健全有力の生長を遂げんとするものゝ、須臾も欠くべからざる要件なりとす(ハ)。

第二に前掲の聖語の我等に教ふる所は是なり、即ち諸君は尚ほ甚だ弱きものなり。然るに弱年の信徒にして偶々、喜樂、仁愛の經驗に遭遇するとあれば、即ち想へらく、我は甚だ強健のものなりと。斯くて益自負に流れ、又其經驗に依頼するに至る。豈亦危からずや。此人や、心を潜めて、今後己れが主にありて如何ばかり強くならざるべからざるものなるかを悟らざるべからず。乞ふらくは諸君努力して、己れの幼稚薄弱なるを感知せよ(ニ)。此の薄弱を自悟するの一念ありてこそ初めて自己の無一物なることを感ずる(ホ)謙遜の精神を生じ、又萬事を主に求め奉るに至るなれ(ヘ)。

第三の教訓は是なり、即ち弱年の信者は何時までも其薄弱に甘んずべからず。宜しく神の恩寵によりて生長增進せざるべからず。進歩して強健なる者とならざるべからず。神の命令嚴としと吾人の上にあり。尚ほ此點に關して神の言は最も光榮なる約束を吾人に與ふ是れ事の性質に於て已に然るとなり、即ち神の小供は進歩せざるべからず、亦進歩をなし得るものなり。新しき生命とは健全なる、强壯なる精神なり、基督の弟子一たび此の生命に己れを委ねる時は、生長の來たるや、蓋し必然なり(ト)。

第四は重もなる教訓にして弱年の基督信徒に最も必要の教訓なり、即

箴八、四〇　十四　一十、〇、一　撒一、前十、三　八、〇　詩八、十九、〇

ち神の新生の嬰兒の生長するとを得るは、獨り神の言なる眞の乳汁に由るといふこと是れなり。神の聖靈より出でし新しき生命は神の口より出づる聖語に由らざれば保全すべからず。我が青年の兄弟よ、諸君の生命は神の言を巧みに都合よく處置するを知ると知らざるとによるもの多く、亦最初より己れの乳汁として用ふるを知ると知ざるとに由るもの多きぞかし(チ)。

同八、十、〇　七、百九十九　五、百、五十、九　三、十、三、〇　一、十二、〇

乞ふ見よ、主が此に母の乳に比して示されたる譬喩の如何に巧妙なるかを。慈母が其嬰兒を養ふや、己が生命の中よりして其小供に食物と生命を割き與ふるなり。小供の養育は盖し愛の最も優美なるものにて、此愛により、小供は母の胸に彼とかき抱かれ、其兩者の濃かなる交際は亦

約六、〇、六　撒十三、〇十　箴二、〇、四　來三、〇十二　約十、〇四　詩百十九、〇十八

比ふべきものもなし。而して母の乳は軟かなれども、而も滋養に富み、正しくかよわき小供の需要する食物たり。

神の道に於ける神の生命と神の能力も亦復た斯くの如し(リ)。神の優和なる愛は其道により、吾人を受けて最も温厚なる最も親密なる交際を垂れさせ給ふ(ヌ)。神の愛は彼の暖かなる軟かき乳汁と齊しく、其道によりて正しく吾人の薄弱に相應したるものを吾人に與へ給ふ。されば神の道は高尚難解にして弱年の信者には相應しからぬものとは努想像するとなかれ。神の道は能く道を受け、能く聖靈の教へを信じてイエスに依頼する信者を以て見れば、實際新生の嬰兒に適したる軟かなる甘き乳汁に相違あらざるなり(ル)。

約二十四〇、弗一、六〇、七、十八

詩百十九、四十七、四十八、四十一、四十二、百十一、百十二、七、十

親愛する弱年の信徒諸君、諸君は今の地位に脚を立てゝ一歩も退かざるを欲する乎、諸君は益〻強健ならんことを欲する乎、諸君は常に主の爲め生活せんと欲する乎。若し然らんには今日諸君の天父の聲を聞け、曰く『今生れし嬰兒の如く眞の乳を慕ふ可し』と。諸君この言を受けて其の肺肝に銘し、諸君の天父の聲として堅く之を保持せられよ。諸君が靈性の生命の惟長は一に神の道を用ふると用ゐざるとに係るぞかし。諸君乞ふらくは神の道を尊重し之を何物にも優れりとせよ(チ)。何は更もあれ、諸君の忘るべからざるとは、神の道は乳汁なるとなり。乳を啜ることは嬰兒に取りては慈母の愛と内部的に活きたる福なる交際をなすとなり。之と等しく、諸君若し聖靈の祐助に由りて神の道を乳として用ふれば、活ける神の愛と暖かなる活ける交際をなすを得べきなり。果して然らば極めて熱心に此乳を慕ふべし。ゆめ〳〵神の道は解するに難く、若しくは面倒なるものと速了するとなかれ。不幸にして然る思ひを抱くが如きとあらば、之を愛好するの念悉く去り亡すべし。されば活ける神の愛を信任して之を受けよ。神の聖靈は温和なる慈母の愛もて、諸君を教導し、諸君の薄弱を助け給ふぞかし。諸君常に信ぜよ、聖靈は諸君の衷なる神の言を生命となし、喜悅となし、神と福なる交際をなさしむべきとを。

貴き救主なる神よ主は我を教へ導て主の聖語を信ぜしめ之に由て神

の子供となし給へり　主は主の聖語を以て今生れし嬰兒を養ふ乳の如く我を養ひ給ふ　主よ我は日々此乳を慕ひ求め奉る　願はくは日々父の愛と活る交通を結び且つ之れに行むべき道を聖靈と主の聖語に由て教へ給へ　聖靈は既に主の聖語と共に我に與へられしことを常に信ぜしめ給はんことを　アーメン

一　聖書は我等自ら神の子たることを知らざるべからざることを教ふ、諸君は之を證明するに、何れの句を最も適切と思料せらるゝや。

二　吾人を以て之れを見れば、乳を啜る嬰兒は、恰かも神の道に於けるキリストの小供の如し。之に就き其の類似の三點は何々なりや。

三　弱年の信者神の道を讀むも之れに由て毫も祝福を受くることなき時は如何にせざるべからざる乎。如此場合に於ては、信仰を以て己れをキリストと交通するものとなさゞるべからずイエスは聖靈によりて教を垂れ給ふべきが故に、心を安んじて依然之を拜讀するの覺悟なかるべからず。

四　吾人の必要に適合せる一句を撰出し、十度之を讀んで心に深く印するは十句を一回讀過するに優れり。是れ僅々たるに似たりと雖も、現に余が受くる所、又余が內心に占得する所にして、余が靈魂の糧たるなり。

五　諸君は隨意に進歩の爲め强健となる爲め最も光榮ある約束と思ふ一句を撰出し、能く之を暗誦し絕えず之を口號みて己が積極

的希望の道とせよ。

六　恩寵に生長する大手段は何ぞや、諸君は之を解知せんとて能く〳〵研究せられしか。

第三章　吾人の心の中なる神の道

『汝ら是等の我言を汝らの心と魂との中に藏むべし』――申十一〇十八。

『人の子よわが汝の言ふ所の凡の言をなんぢの心にをさめよ』――結三〇十。

『われ汝にむかひて罪ををかすまじき爲になんぢの言をわが心の中に藏へたり』――詩百十九〇十一。

爾曹眞の乳を慕ふ可し之れに由て爾曹長つことを得ん。此慕はしき一語の教ふる所によれば凡ての青年の信者は生長發達の願ひなくんば

(イ)中三十、詩一百二十九、同一〇四、三十六、一約七、三〇八、同三十八、三〇五、羅五一〇、四〇七、三十九、

已む、若し是れあらば、神の語を乳として受け、又神の生命と愛との活ける配分として受けざるべからず。此故に神の言を取扱ふには如何にせざるべからざるかを熟知すると、吾人に取りて極めて大切のことす。人は神の言を受けて之を心に藏めざるべからざると、是れエホバの命なり(イ)。神の言は我等の心を占領し、我等の心を滿さゞるべからず。是れ抑も何の謂ぞや。

心は是れ神の殿なり。神の殿には外庭もあれば内部の聖所もあり。心も亦然り、其庭の入口は即ち理解力なり。何事も我が理解せざるとは心に入るの道理なし。されば神の言と雖も、亦其庭に入らんとするに方り、先づ理解の門を潜らざるべからず(ロ)。已に此門を潜れば、記臆力と回想力

(ハ)詩百十九、〇廿四、十太十九、三〇三徒、八十、〇三徒、十〇十五、詩百十九、十六、十八〇三十八、約五〇三七、八〇三十七、羅十十、〇七、廿七、十六、出廿五、十六、詩〇、三十一、同四十〇、九、十〇十六、四三、

と之を其庭の内に保存すれども(ハ)、未だ是れ正當に心に入り込みたるにはあらず。此の外庭よりして更に奥殿に入るの門あり、北門を稱して信仰といふ。我が信する所即ち是れ我心に受けたるなり(ニ)。事此に至れば愛により、亦意思の服從により、堅く心の中に保たるゝなり。而して此事の起りたる心即ち神の聖所たり。神の法は即ち其櫃の中にありたる如く、亦此にあり。而して靈魂は叫びていふ、『神の法は我心に在り』と。(ホ)

弱年の信徒諸君よ、神は諸君の全心、諸君の愛心、諸君の全我を求め給へり。諸君は全身、全靈を神に献げられたり。神は諸君を受け給へり。而して諸君と諸君の心とを全く己が有となし給はんとするなり。亦神の聖語を以て諸君の心を滿さんとはするなり。人は己れの心の中にあるもの

を愛重す、是れ常に考ふるものゝ自ら喜を來すが故なり。されば神は吾人の心に其聖語を藏へんとを望み給ふ。聖語の在る所には即ち神自らも在し、亦其大能も在す。神は自ら其聖語を成就せざるべからずと思ひ給ふが故に諸君にして神の語を有しなば、即ち諸君は神自らを有するものにて神は諸君の中に働き給ふべし(へ)。神は諸君が其心の中に其聖語を受けて之を藏めんとを望ませ給ふ。されば諸君若し之を實行せば、神は大に諸君を祝福すべきなり(ト)。

創一、廿一、約廿一、三、〇、四、

中十、十一、同廿一、八十、〇、二〇、詩三一、同百十四、ト九、

余は弱年の信徒諸君をして『我が言を汝らの中に藏めよ』てふ諸君の天父の聖語を單純に受け入れしめ又其全心を擧げて神の聖語に充たしむるを得んと、是れ余の切望に堪へざる所なり。諸君願くは之を實行すると決心せよ。諸君願くは其讀む所を理解するの勞を執れ。已に之を理解すれば、常に其一二を記臆に止めて之を咀嚼せよ。心を以て神の聖語を味ひ、造次顚沛反覆熟思せよ。神の聖語は種なり、種は時日を要す、又地中に播かるゝを要す。神の聖語の吾人の心に於けるも亦斯くの如し。諸君願はくは諸君の心と諸君の愛と諸君の希願と諸君の意思の然諾及び決心を一切神の聖語に捧げ、また餘力を遺すなかれ。『エホバの法を喜て日も夜も之を思ふ人は福なり。』諸君願はくは、其心をして世と、世の思念との殿たらしむるとなく、神と神の思念の殿たらしめよ(チ)。人若し毎日其心を開て神の聲を之に入らしめ、神の宣ふ所を聞き、能く此言を藏へて能く之を實行するとに忠實ならん乎、神も亦其心を開て吾人の

四十五、十八、九百六十、五、約十、七、六、〇、八、七、

詩百十九、〇、六十、九、約十、三、可十、五、七、〇、六、七、十、八、

約十一、四〇廿壹十四、〇
約三、二、四、〇廿四、〇
默八、十三、〇

聲を入れ、吾人が祈禱によりて神に告げ參らする所を聞くに忠實なるべきなり。

愛する信徒諸君よ、願くは、今一應本章の初めに掲げし聖語を一讀あれ。是れ諸君に與ふる神の聖語なり、――即ち諸君を嬰兒として受け給ひし天父の聖語なり、諸君を神の嬰兒たらしめ給ひし神の聖語なり、――諸君願はくは之を受けよ。神は諸君を其子として、諸君が其全心を捧げ、之を滿たすに聖語を以てせんとを求め給ふ。諸君は果して之を肯んずるか。諸君は如何に之に答ふべき乎。主イエスは以上記したる如き順序に基づき、其大能もて諸君の裏に其聖業を竣工し給はんとす(リ)。諸君願くは明瞭に『此の言を我心の中に藏へたり』『我れ汝の法をいつくしむこと如何計ぞや我れ終日之を深く思ふ』と答へ、また間斷あるとなかれ。とひ其言にして理解に困難なるが如く見ゆるとも、多々益々熟讀せよ。天父は之を諸君の心の祝福たらしめんと約束し給へり。されど諸君は先づ之を其心に占得せざるべからず。而して後に神その聖靈もて、諸君の中に生命あり力あるものたらしめ給ふとを信ぜよ。

『わが子よ汝の心を我に與ふべし』と詔ふ父なる神よ、　我は我心を主に献げ奉れり、　主は又主の聖語を我心に保ち之を藏ふることを命じ給ふ。故に我は心を盡して主の誡を守るべしと答へ奉る　父よ願はくは日々我を教へ給ふて主の聖語を受け其恩惠深き感化を蒙る道を知

らしめ給へ　縦令主の聖語を悟り得ず其能力を感じ得ざる時にも猶主は主の聖語をして其裏に活て力あるものとなし給ふことを信ずる信仰を強め給へ　アーメン

一　知識を増進するために神の言を讀むと、信仰によりて之を受くるとの區別如何

二　神の言は猶ほ種子の如し。種子は時日を費して後ち發生す。此間は靜かに地中に埋め置き、半途之を取り出すが如きもあるべからず。余や只神の言を讀み去るのみなるべからず、亦之を玩味し、之を熟思せざるべからず。而して後にこそ、神の言は我中に効力を顯はすなれ。神の言は終日我に在らしめざるべからず、我に居らしめざるべからず、我に宿らせざるべからず。

三　神の言を讀み、眞實祝福を待ち望める者にも、時としては御言の働き極めて微弱なるもあるは何故ぞや。此の主因は種々あるべし雖、其一は即ち言自ら其働きを始むべき日あるを確信して種子に生長の時日を費すもなく又之を厳へて回想するもなき爲めなるに相違なし。

四　イエス初めて其の祭司の長としての祈禱の中に示し給ひつる信者の特徴は何ぞや　（約十七〇）

五　神の言に滿ちたる人の心の祝福は何々ぞや

第四章　信仰

『主の言を信せし者は福なり蓋は主の語り給ひし如く必ず成べければなり』――路一〇四十五

『是故に人々勇めや如此われらに語り給へる如く必ず成んと我神を信ずれば也』――徒廿七〇廿五

『アブラハムは神は其約束し給ふ所を必ず成得べしと心に決め信仰に由て強くなれり』――羅四〇廿一

神は諸君が其聖語を享けて之を心に藏へんとを望ませ給ふ。信仰は蓋し此言を取りて心の最奥所に受け入るゝの本道なり。果して然らば、願はくは弱年の信者諸君よ、信仰の何ものたるを明らめたるが上にも一層能く之を明らめんとを勤めよ。斯くてこそ何故かまで重大の事物信仰と相關するやを悟るに至るべく、亦充分なる救濟は日々信仰に據りて成し遂げらるゝものなりとの意を解し、毫も餘蘊なきに至たるべけれ(イ)。

代イ上二十
〇米十十十十壹四
九二十三一五五
二〇、〇、五、
約三來三〇

讀者よ、請ふらくは、今一應前に掲げたる三個の聖語を讀み、此の三聖語が信仰に就て敎ふる所の主眼は果して何ものなるかを探究せられよ。諸君願はくは全心を之れに傾注して思ひを他に馳せず、先づ此等の神の聖語を讀み其信仰に就て諸君に敎ふる所を自問自答せよ。

吾人は前の聖語を見て、信仰は常に神の言ひし所、神の約束せし所に附着するものなるを知る。大凡そ名譽を重んずる人の言ふや、必ず亦之を實行す。神も亦然り。神にして何事かをなさんとすれば、必ず先づ其道によりて之を語り給ふ。されば神の人たるものは、此一事を確信し堅く執りて動くとなかれ。若し然らんには、此の人の爲め、其宣ひつる所を實行し給ふべきなり。神にありては言行常に相悖らず、言あれば茲に必ず行ひあり。故に曰く『神の言ふ所は之を行はざらんや』と(ロ)。余若し何事か神が我が爲めになさんとの約束の言を有する時は、余は何日如何なる時を問はず、神之をなし給ふべきを確信して安んずるを得。余は只神の言を捕へて之を確握し、神が之を成就し給ふ時の來るを待たば、我能事即ち終る。此上は神自ら我が爲めに其言を遂行するの勞を執り給ふべし。故に余は何事にもせよ、之を感じ、之を實驗するに先ち堅く神の約束を握るを常とし、而して又信仰により、神我が爲め益あるとを爲し給ふべきを知るなり(ハ)。

さて信仰とは果して如何なるものぞ。是れ即ち神の宣ふ所は眞實なりとの信用に外ならず。神若し何某の物は實在す、何某の物は現存すと宣へば、即ち未だこの物を見るに及ばずと雖、信仰は先づ之を喜ぶ(ニ)。神若し何物かを我に與へたりと宣ひ、又天にある何某のものは即ち我がものなりと宣へば、余は一點の疑ひもなく、信仰によりて其ものは即ち余のものなるを知る(ホ)。神若し何事か起るべしと宣ひ、又我に何事をか爲

ロ 創廿一、一〇
イ 二十二、二民
ハ 二十二、七〇
ニ 二十二、十八同
ホ 二十九、三書
ヘ 四十五、一〇
ト 同十四、三〇
チ 後廿、七母
リ 二十五、一〇
ヌ 二十九、八詩
ル 代上二、一〇
ヲ 十五、一四
ワ 十四、九〇
カ 百十九、四
ヨ 路一、一〇
タ 十八、三四
レ 十五、三約
ソ 三、三四
ツ 〇五、一〇
ネ 同十一、〇
ナ 四十、一〇
ラ 二十、一來
ム 九、一十
ウ 一、一八
ヰ 羅二、一七
同四十

〇五、同
〇カ、同
一七、二
十加三、ヒ
一〇、弗
〇九、同
十七、三十
ホ約三、十
六、七、
三十六、
約壹五、
十二、〇
三、
羅八、三
十八、〇
三腓
八三、
〇二、撒
八五十
〇二、彼
四、前
一四、
五〇、
ト來
十一、
一〇

さんと宣へば信仰の之を見ると、猶は目前に之を見たるが如し(ヘ)。余未だ之を見ずと雖、即ち之をありとし、其もの未だ來らずと雖、即ち來るとなし、一點疑ふ所なきものは、即ち信仰なり。』夫れ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とするものなり』(ト)信仰は常に神の宣ひし所をのみ是れ求め而して亦神の忠實と能力に依賴して其の聖語の應驗を待つ。

さて吾人をして再應聖書の聖語を査察せしめよ。聖書にマリヤに就て言へるとあり『主の言を信ぜし者は福なり、蓋は主の語り給へる如く必ず成る可れば也』と。大凡そ神の語り給へる事は、すべて皆我に成るべし。余は然か信じて疑はざるなり。

アブラハムは神の約束し給ひし所、其必ず成就し給ふべきを充分確信したりしと稱せらる。斯くの如く、神が其約束し給ひし所を確實とするとは、蓋し信仰の確認なり。

パウロの言は正しく之と符節を合するが如し。即ち曰く、『神の我に語り給しことは神必ず約束の如く成就し給ふことを知れり』と。之に由て是を觀れば神は其語り給ひし所を成就するものなりとは、パウロにありては動かすべからざる信仰たりしなり。

キリストにある弱年の信徒諸君、諸君の裏にある新なる生命、永遠の生命は即ち信仰の生涯なり。諸君は此の信仰の生涯とは、如何ばかり單純に、如何ばかり多福のものなるかを解せざる乎。余は毎日々々往て神の

言を探り、其既に成し給へりといひ、又將に成さんと言ひ給ひし言を聞かざるとなし(チ)。斯くて余は悠々神は其約束し給ひし所を實行するの力あるものなりと宣ひつる言を考へ、且つ一點の疑を抱かずして之を確握す。然る後ち余は嬰兒の如き精神もて、神が其言の貴き約束の應驗を翹首して持つ。主の言を信せし者は福なり、蓋は主の語り給ひし如く必ず成べければ也。余が靈魂は現に之を實驗せり。神は約束す、――余は信仰す――神は成就す。是れ即ち新しき生命の秘訣なり。

（チ）加十、二〇二
〇二、同三
同五、五〇
五、六、來十
十〇三
五、彼前
一〇八、

我父なる神よ主の子供なる我等の歩むべき幸福なる信仰の生涯を與へ給ひしことを感謝し奉る　我は自ら何事をも行ひ能はざれども主は凡てを行ひ給ふて之を主の聖語に由て告知らせ給ひしが故に我は主の聖語を信じ之を主の御許に携へ至る時は必ず成就なしたまふべし　父なる神よ我は斯く容易にして榮光ある信仰の生涯を主と共に歩み奉るべし　アーメン

一　信者は其智識を增進するために、聖書を讀み、聖書を探究せざるべからず。之がためには日々重もなる部分を一處若しくは一處以上熟讀すべし。然れども亦信仰を堅うする爲めに聖書を讀まざるべからず。之がためには宜しく一二節を撰出し、之を問題として特別に熟想し、信仰を以て之を已れに適用すべし。

二　諸君、信仰は大問題にして到底解知し難きものゝ如くに唱ふる論者に惑はさるゝなかれ、是れ余の切望に堪えざる所なり。信仰とは神の眞理を語り給ふを信用するに外ならず。故に何くれとなく、神の約束を取り、而して左の如く神に告げ奉らすべし、曰く余は確かに此の約束の眞理なるを知る。亦確かに汝が之を成就し給ふべきを知ると。去らば神必ず之を成就し給はん。

三　不信仰は到底我が力に及ばざる弱點なるものゝ如くに嘆くとなかれ。諸君は如何ほど弱くとも、神の子としては即ち信するの力あるものなり。是れ神の聖靈諸君の中に是れあればなり。唯諸君の心に記すべきは他にあらず、即ち信ずるの力あるに先ち何人も事を了解するを能はず、されば先づ初めに主に對して其の御言葉は眞理なるとを確信すといひ、其後も亦絶へず斯く言ふべし。且つ又堅く神の約束を握り、神に依賴して其成就するを待つべし。

第五章　神の道の能力

『信仰は聞よりいで聞ところは神の道に由なり』――羅十〇十七

『柔和を以て爾曹その心に殖たる所の靈魂を救得る道を受べし』――雅一〇二十一

『是故に我儕神に向ひ爾曹か我儕より神の道を聞しとき之を人の道とせず神の道として受たるを斷す感謝す此道は誠に神の道にして爾曹信する者の中に働くなり』――撒前二〇十三

『それ神の言は活てかつ能あり』――來四〇十二

神の小供の新しき生命は神の言を用ふるの當否に由りて消長すること多し。余乞ふ、今一應主にある弱年の兄弟姉妹に對し、之に就て語る所あらん。

信者は只信仰によりて萬事を受くべく、萬事を成就すべしと自覺するに至れば即ち貴重の賜物を受けたりといふべし。

信者は只信仰すべきのみ、已に信ずれば神その約束せし所を成就するに意を注ぎ給ふべし。又信者は毎朝イエスに頼り憑み、其新しき生命はイエスより與へられしものにて、我が裏に働けるとを信ぜよ。さすればイエスは此新しき生命の活働するやう、能く配慮し給ふべきなり。

されど此人茲に至りて他の誤謬に陥るべきの危險あり、他なし、斯る

路十七〇
五十〇六六羅
七十八、

偉大の事を成すの信仰は必ず偉大のものならざるべからず、故に斯る大信仰を活用する爲めには偉大の能力なかるべからずとすると是れなり(イ)。然るに此人己を顧みれば、斯る能力の存するを感せざるが故に、遂に其信せざるべからざるほどに充分信ずると能はざるものとなすに至る。思ふに此の誤謬は、其人の一生を誤らずんはあらず。されば諸君、乞ふ來れ、我即ち斯る思想は如何ばかり顚倒のものなるかを說かん。諸君斯る大信仰を用ゐて神の言を成就せしめんとするは誤れり、諸君の信仰、言を成就せしむるにあらで神の言却て自ら來り、而して諸君の爲め其の有せさるべからざる信仰を齎らすなり。『神の言は活て且つ能あり』、神の言は能く諸君に信仰を生せしむ。聖書に曰く、『信仰は

羅十〇七、來四十〇二、

神の道に由れるなり』と(ロ)。

吾人は前に心を神殿に譬へ、且つ之に內外の二部あることを言ひしが、諸君之に就き尙ほ一考あれ。其外庭は即ち理解を以て其門戶となす。亦其の內殿は心の信仰を以て其入口となす。人各天賦の信仰——歷史的信仰——あり、余は先づ此の信仰もて神の言を受け、之を藏へ、之を熟思せざるべからず。余は亦自ら『神の言は確かに眞實なり、余此上に立つに何の心配もなし』と云はざるべからず。斯くして余は神の言を外庭にまで携へ來れば、心は即ち之を其內に受け入れんとして、內より之を渴望す、事此に至れば、神の言は其の神聖なる生命力を顯はし、芽を發し根繁茂す、彼の地に播きたる種子の根を四方に播げて、次第々々に深く地中

に入るが如く神の言も亦次第々々に聖所へと進入するなり。斯くして神の言は即ち眞正なる救の信仰を起すなり(八)。

（撒前十三、二〇雅一〇、二二彼前二十三、一一）

青年の信者諸君願くは此理を領得せられよ。神の言は活て能あるものなり。諸君は神の言によりて新たに生れたるなり。神の言は諸君に信仰を生じ、神の言によりて信仰は來るなり。されば諸君願くは、神の言を受くるに他の雜念を抱かず、唯其の能く諸君にありて働くことを思ふべし。諸君願はくは常に言に滿たされ、之に時日を貸せ。神の言は神の生命を固有するが故に、之を其心の奥に藏むれば、軈て生命は諸君の中に起るべし。而して亦有力にして何事にも堪ふるほどの信仰諸君の衷に起るべし。

果して然らば諸君決心せよ、苟めにも余信ずる能はずと言ふと勿れ。諸君は能く信ずることを得。諸君は其裏に神の聖靈を有す。神の此言は確かに眞實なり、若しくは確かに眞實ならずとは性來の僞なる人と雖尚ほ能く之をいふ。而も若し靈魂の懇願を以て『是れ眞實なり、余之を信ぜん』といふに至れば、神の言を活て且つ能あらしむる活ける聖靈は之をして活ける信仰たらしむるなり。之に加ふるに、聖靈は只神の言の中に存するのみならず、又諸君の中に存す、されば諸君自らは己れの信仰を感ずる能はずとも己れは能く信仰するを得るものと覺悟せよ(二)。諸君願はくは實際に神の言を受けよ、さらば諸君の裏に大なる信仰を起すべきなり。故に諸君若し神の言を讀まんとせば、必ず先づ諸君をして必定

（申三十二、〇四十、六、四十、七、書一、〇七、九、）

信仰を起さしむるほどの言を讀み、而して之れに依頼せよ。

さて此の活ける能は獨り神の約束にのみ備はれるにあらず、神の命令も亦之を備ふるなり。余の初めて神より命令を受くるや、宛ども自ら之を遂行するの力を感得せざるものゝ如し。然れども余若し一向專念に神の言を神の言として受領し、其能く信仰するものゝ裏にありて力を顯すべきを信じなば、――即ち余其の言に依頼して其働きを得んとを願ひ、又此言に動力を與へ給ふ活ける神に依頼せば――、此命令は即ち我衷にありて服從の願望と服從の力とを我に與ふべきなり。余若し神の命令を領し、且つ堅く之を握りなば、能く我に從順の願望と意思を生ぜしめ、余をして天父の宣ふ所は確かに之を實行するとを得との確信を抱かざるを得ざらしむべし。げに神の言は信仰と服從とを幷び生ずる者なり。キリスト信徒の服從は即ち信仰の服從なり。余は聖靈により て神の聖旨を履行する力あるものなるを信せさるべからず。蓋し神の能は其の聖語によりて我が裏に働くを以てなり。神の言は我を愛し給ふ活ける神の命令なる以上は、即ち亦我が力なり(ホ)。

此故にキリストにある弱年の信徒諸君願くは信仰を以て神の言を受くるとを練習せよ。たとひ最初は其意味を領解することなしとするも、絶へず之を沈思默想せよ。神の言には其中自ら活ける能の存するあり、能く自ら其榮光を輝かすべし。諸君或は之を信じ、之に服從するの能を感せずとも、言自らは活て能あるものなり。されば之を取りて且つ堅く

羅三、一
六〇、同十〇
六六、〇、
加撒前、
六一三、廿
雅一、一〇、一〇

之を握りなば自ら能く神の能をもて其業を全ふすべきなり。神の言は信仰と服從を發起せしめて、且つ之を養成するものぞかし。

主なる神よ主の聖語には權能と生命ありて之を受け之を保つ者の心に信仰と服從を生ずることを漸く曉り奉れり主よ主の聖語は我心の裏に主の聖旨を成就なしたまふことを信じ凡て主の聖語を活る種子として我心に藏むる道を教へ給へ　アーメン

一　忘るゝなかれ、言を信ずといふも、此言を語りし人を信ずといふも、又此の言の中に約束せられたる事件を信ずといふも、畢竟相等しくして毫も異なる所なきなり。されば神の約束を受くる其の信仰は亦是れ約束を與へ給ひし天父を受くる信仰なり、抑も亦約束に由りて與へられし救を持ち給ふ神子を受くる信仰なり。決して各別にはあらず。諸君願はくは言と活ける神と互に引分けて考ふるとなかれ。

二　言を受くるに當り、單に之を『人の言として』受くると『信ずる者の中に活て働く神の言として』受くると、其間に截然たる區別あるとを知るべし。

三　余は思ふ、諸君は今信仰を强からしむるに欠くべからざるものを知られたるならんと。諸君乞ふ其の信仰の全幅を働かせよ。神の約束を受けよ。神の約束は確に眞實なるものなりと己れに告けよ。

又諸君は神に依賴して其艱險を待つものなりと、往て神に告げよ。神の約束を玩味し、之を離れずして神を語れ。神に依賴して其宣ふ所の汝に成らんとを求めよ。さらば神確かに然かなし給ふべし。

四　聖靈と神の語とは常に相并行す。故に神の言が余之をなさゞるべからずといひ、亦聖靈によりて余之をなすとを得さいふものは、余即ち悉く然か確信するを躊躇せず。余神の言を受け亦神の約束を受くるに方りては、其活ける神の活ける言にして、信ずるものに働くべきを信じて之を受けざるべからず。

第六章　神の賜物なるキリスト

『それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずる者に亡ることなくして永生を受しめんが爲なり』――約三〇十六、

『その首靈されぬ神の賜物に由て我神に感謝するなり』――哥後九〇十五、

神の世を愛重し給ふや斯の如し、曰く然らば如何ほど愛重し給ふか。其獨子を世に遣はし、誰にても之を信ずるものに之を與へしほどに愛重

イ約一〇十六、
同四十四、
廿三、
五廿三、
同八〇三、
十二〇三、
十四、
一〇二、
同二十三弗、羅

し給ふなり。如何に之を世の人に與へ給ひしか、曰く、其生るゝや人の形を以てして之を與へ、永遠吾人と一躰ならしめたり、亦其十字架上に死するや、代理人として之を與へ、以て吾人の罪惡を除き、以て自ら詛を負へり。亦天の諸權を支配する吾人の代表者、吾人の仲保者として天の位にある彼を與へ、以て我等の幸福を處理せしめ給へり。亦聖靈を注ぐとにより、之を與へ、以て吾人の中に宿り、以て全然吾人の有たらしめ給へり(イ)。然り、神が其の御子を吾人に與へ、吾人の爲めに與へ、吾人の中に與へ給ひしといふは、即ち其愛に外ならず。

神の子は即ち神御自身に外ならず。此の一事以て神の愛なるを知るべし。蓋し神は吾人に與ふるに或物品を以てしたるにあらず、却て神は吾人に與ふるに或人物――活ける人物――を以てしたればなり。なにがし、くれがしの祝福を以てせるにあらず、却て萬の生命、萬の祝福に充てる彼――イエス自ら――を以てしたればなり。神の吾人に與ふる所は單に救罪にあらず、單に信仰復興にあらず、單に稱聖にあらず、單に榮光にあらず、併ながら是れ其御子イエスなり。主イエスは神の愛子なり、神の同位者なり、神の親友なり、神の永遠の祝福なり。而して吾人がイエスを吾人の有となすと、尙ほ天父が己れの有となせるが如くにするは、一に天父の敵慮に存するなり(ロ)。神は之が爲めにとてイエスを吾人に與へ給へり。凡そ救濟とはイエスを有ちイエスを懷き、イエスを喜び樂むをいふ。此外亦救濟なるものあるとなし。神は其の子を與へ給へり、是れ

太一〇十七、
二十一、
二十七、
約十一、
二十七、
羅八、
八十五、
廿九、
一來二、
十

四〇十七、
九二、
十、〇
來廿
七廿六、
四、
約廿四、
九、
使四〇
十、

全然之を吾人の有たらしめんとてなり(六)。

然らば即ち吾人のなさゝるべからざるとは何ぞや。曰くイエスを受納するにあり、神の賜物を領得して之を我が專有とするにあり、我が所有としてイエスを喜び樂むにあり。是れ永生なり、『神の子をもつ者は生を有つ』(七)。

されば余は弱年の信徒諸君が、此の理を諒解せられんと余の切望する所なり。神の我等に對する愛の一大事は、其の御子を吾人々類に與へ給ひしこと是なり。凡て吾人の要するものは一つとして其中に備はらざるはなし。此を以て吾人の全心を傾注すべき一大急務は吾人に與へられし此のイエスを受け、之を吾人の有と思ひ、又之を吾人の有として

(八)詩七十三、七十五、廿七、百四十、同二、六、二十、約二、八、〇、十、二、四、來三、四、十

(一)約一、二、〇、哥後十、三、三、五、西十、二、約十、壹二、六、五、〇

用ゆるにあらざるべからず。毎朝目を醒ます時は、我は我が爲めに萬事を爲し給ふ耶蘇を有すとの思想を以て、其日を迎へざるべからず(ホ)。或は薄弱、或は暗黑、或は危險に臨む時、或は願事あり、或は所要あるの時、諸君必ず先づ思ふべし、我は我が爲めに萬事を遂算なく取計らはせ給ふイエスを有す、神我が爲めにイエスを與へ給ひたればなりと。諸君の要する所は赦罪なるにもせよ、慰藉なるにもせよ、堅信なるにもせよ、或は亦危險に陷ゐり、若しくは危險に陷らんとするの虞あるにもせよ、或は亦何がし、くれかしの事件に就て神の聖意のある所を知らず、たとひ之を知るも、其御意を爲すの勇膽元氣を缺けるを悟りしにもせよ、諸君必ず先づ思ふべし、天父は之を守らせ給はんとて、我にイエスを與へ給へ

(ホ)約十五、〇、五、羅八、〇、廿七、哥前一、〇、三、十、三、一、〇、三、弗、同二、〇、十、腓四、〇、十三、提後一、〇、十二、

りと。

諸君願はくは之が爲めに、日々諸君のものとして神の此の賜物を顧念せよ。此の賜物は道によりて諸君に與へられたり。神の道を信じて神の子を我が有とせよ。日々に更めてイエスを受納せよ。諸君は信仰に由て神の子を有つことを得るなり(一〇)。神の愛は其御子を諸君に與へたり。御子を受領せよ、而して之を心の愛もて堅く握るべし。神がイエスを與へ給ひしといふは、諸君に生命を與へ、永生を與へん爲めに外ならず。さらば諸君之を取りて其生命とせよ。心も舌も、行も全くイエスの能力と響導に委ねよ(一一)。青年の信徒諸君力は如何ほど弱くとも、罪は如何ほど深くとも願くは其道を聞け。神は諸君にイエスを與へ給へり。イエスは即ち諸君の者なり。イエスを受領するといふは、畢竟是れ信仰の結ぶ果のみ、賜物は即ち諸君の爲なり。イエスは諸君の爲に萬事を爲し給ふべし。」

（約一〇十、二、九、約壹二、〇十）（哥後五〇十五、八、腓三〇、八）

我主なるイエスよ今日も亦新たに主を受け日々主を受け主に滿る恩惠と主の具へたまふ地位を主と共に斷へず我有となし奉る　我智慧我光明わが嚮導者なる主をわが豫言者となし奉る　我爲めに全き復和をなし我を神に近つけ我を潔め給ふ主をわが祭司となし奉る　我を導き我を守り我を祝み給ふ主を我王となし奉る　主よ主はわが凡てにして主は全くわが有に在し給ふ　此の言ふ可らざる宏大なる神の賜物を感謝し奉る　アーメン

一　與ふてふ語を深く咀嚼せよ。神は驚くべき仕方もて與へ給ふ、即ち何等の價値なきものに對し、一點の報酬を求めずして之を與へ給ふ。亦神は有効的に之を與へ給ふ。神の與へ給ふものは、眞に全く吾人の有たらしめんとの思召なり。吾人の有たらしめ、心内的に吾人の專有たらしめんとの思召なり。諸君願はくは之を信せよ、又願はくはイエスが其携へたる凡てのものと共に全然吾人の有となるべきを確信せよ。

二　亦受くるといふ語をも深く咀嚼せよ。イエスを受くるとイエスを受けて堅く之を握り、之を用ふるとは蓋し吾人の大事業なり。而して此の受くるといふことは、畢竟信任するとに外ならず主は其の有てる凡てのものと共に悉く皆我がものなり。イエス――イエスの全体――を諸君のものとして日々之を受けよ、是れ蓋し信仰の生涯の秘訣なり。

三　亦有つといふ語をも熟考せよ。『神の子をもつ者は光を有つ』。我が有つものは我の有にして隨意に之を用ゐ、之を使ふべし。我は隨意に之を處分すべく、思ふ存分之を樂むを得べし。『神の子をもつ者は生命を有つ』

四　神の與へ給ふものの諸君の受くるもの、諸君の現に今有するものは、活ける神の子に外ならず。是れ特に注意すべき一事なり。諸君之を受くべきか。

第七章　耶蘇の捨己

『キリストは教會を愛し其爲めに己を捨給へり此は教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なりまた點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり』――弗五〇、廿五――廿七

イエスが罪ある人の爲めに爲さゞるべからざりし事業は、非常に宏大に非常に驚くべきものなり、されば、イエスは此の事業を爲す爲めには、寔に其身を捨るの止むを得ざるものありき。是れ此外に他の道なかりしを以てなり。然るにイエスの吾人々類に對する愛心も亦非常に宏大に非常に驚くべきものにてイエスは實際吾人に代り、亦吾人に對し己れを與ふるを辭せざりしなり。亦イエスの捨己も非常に宏大に、非常に驚くべきものにて、其己れを捨てゝ贖ひ給ひし所のものは、一切殘らず、實際に完全に吾人の有となれり。是れ併しながら聖なる全能のイエス自ら己れを棄て給ひたればなり、即ち吾人の爲めに己れを與へ給ひたればなり(イ)。さて此に必要なる一事はイエス吾人の爲め己れを捨て給ひしことを間違なく諒解し、確かに之を信仰すると是れなり。

果して然らば、何等の目的ありてイエスは教會のために己れを與へ給ひしか。曰く乞ふ神の宣ふ所を聞け。即ちこは神が教會を聖からしめん

イ　加四、一〇　同二〇、弗五〇、二十、二五、提前二、六、多二、四、一〇

為めなり。亦教會をして疵なからしめむが為めなり(ロ)。是れ蓋しイエスの目的なり。故に人若し己れを此の目的に投合せしむるを其最高の分となし、然る後ち、之が為めに己れを捨て給ひしイエスの効績に依頼せばイエスの目的は即ち達せらるべきなり。

(ロ)弗四〇四、一廿、一〇、二四〇二同、三〇、一廿、三廿〇三同、四廿、三同〇十撒〇七同、五十、廿前、五〇

倘ほ一言神の聖語を聞け。『キリストは我儕の為に己の身を棄て給へり、是れ我儕を諸の罪より贖ひ出し且つ己の為に一の民を潔め之をして熱心に善事を行はしめん為めなり』(ハ)と。然りイエスが己れを與へ給ひし目的は、聖き民、イエス自らの民、熱心なる民を己れに備へん為めに外ならず。余イエスを受け、又我がために之を為さんとてイエス己れを捨て給ひしことを信じなば、余は慥かに經驗するを得べきなり。又余はイエスに由りて潔めらるべく、イエスの有として堅く掌握せらるべく、イエスの為めに働くの熱心と喜樂とに滿たさるべきなり。

(ハ)多二〇四十

さて又イエスの捨己の業は如何なれば吾人を特に全く己れの有となさん為めなるか、又如何なれば『我儕を主の前に立て』ん為めなるか、又如何なれば『主の為めに己が民を潔めん為』なるか、是れ將た注意すべきなり。余やイエスの我が為めに己れを捨て給ひしことを悟れば悟るほど、考ふれば考ふる程、余は切に己れを神に献げざると能はず。捨己は交換的なり。愛即ち兩者より來る。イエスの己れを與ふるとは吾人の心に深き感動を與へ其の愛と其喜に滿ちたる我が心は全然イエスの有となり了るなり。されば、イエスは余に己れを與ふるとに由り、却て亦余を己

れの有となし彼れは余のもの、余は亦彼れのものなるなり。知ぬ、余は全然我が有としてイエスを有し、而して亦イエスは己れの有として全く余を有することを(二)。

果して然らば余は如何にせば斯る幸福の生涯を充分に享樂するを得る乎。『今我活けるは我を愛して我が爲めに己を棄てし神の子を信ずる。信仰に由りてなり(ホ)。信仰に由りて余は確實に尊貴に、余のため己れを棄て給ひしとを臆念し、沈思す。信仰に由りて余はイエスの捨己を我が專有となす。信仰によりて余はイエスの此の捨己を確信せしめ給ふべきを信じ、イエスの我と交り、我が中に己れを啓示し給ふべきを信ず。信仰によりて余はイエスを我が有となし、イエスの我が爲めに萬行を爲し給ふべきを信じ、之によりて充分救ひの經驗を玩味するを得るを期す。信仰によりて余は我を愛し、我が爲めに其生命を捨て給ひし此のイエスにありて活く。而して余は敢ていふ『最早我活けるにあらず、キリスト我にありて活けるなり』と。信徒諸君願はくは其滿腔の精神を以て斯く信ぜよ、曰くイエスは諸君の爲めに己れを與へぬ。イエスは全く諸君の有なり、イエスは諸君の爲めに萬事をなすべしと(ヘ)。

オー主なるイエス　わが爲めに生命をすて給ひし主の愛は如何に大なるかな　主の中には永生あり　主御自身は生命にして凡てわが生命になくてならぬものを與へ給はんが爲め主御自身を授け給へり

○二十六、主は我を潔め我を聖別し我をして善行に熱心ならしめ給ふ　主は
○十一、同五、我を全く取て主の有となし又主を我に賜ふて我有となり給ふ　主よ
○二十、同二十三、主は眞實に我生命の凡に在しませり　願はくは此心を正しく敎へ給
○廿六、加弗、廿一、○九、同三十、○十七、
へ　アーメン

一　父の神が子の神を與へ給ひしは其大なる愛に由るとなり。イエスが己れを與へ結ひしも亦其愛に由りてなり。（羅三〇十六、弗五〇二十六）イエスを受領して之を我が有とするは神の愛に於ける生命に入るの門なり。此の生命は卽ち最高の生命なり。（約十四〇廿一、廿三、同十七〇廿三、廿六、弗三〇十七、十八）。吾人は信仰に由りて愛に進み亦愛に居らざるべからず（約壹四〇十六――十八）

二　我は今日イエスを受領して我が生命となし、我が爲めに萬事を為し給ふものとなせり。諸君は斯る嬰兒の如き信仰をもて日々を迎ふるほどに、學ぶべきほどの學課を悉く學び盡されたりや、

三　イエスを受領し、イエスを有つといふとは、イエスと我等の關係、間接にあらずして直接なるとを前定せるなるを記せよ。イエスにありて喜び、イエスと樂しく語らひ、イエスを我友として其愛にありて樂むとは皆吾人をして眞にイエスを受領せしむるの信仰に至らしめずんばあらず

第八章　神の諸子

『彼を接その名を信ぜし者には權を賜ひて此を神の子と爲り』。―約一〇十二

與へらるゝものは受領せざるべからず、然らざれば何の益だにあるとなし。夫れ神の愛の第一の大事は其御子を賜ひしとなりとすれば人類の第一の事業は其御子を受くるとならざるべからず。而して神の愛の一切の祝福は獨り恒に新たに、恒に活ける天父の御子によりて來るものなりとせば是等一切の祝福は常に新たに、常に間斷なく日々御子を受くるとにより我等に入り來るなり。

イ哥後十〇十五、撒前八一〇、同三〇十、撒後一〇三

愛する弱年の基督信徒諸君、諸君は之を受くるに必要のものを知らん、蓋し諸君は既に主イエスを受けたればなり。されど此の受くるといふ一事は諸君の信仰絶えず活動し、益々明瞭に、益々堅固となることを含蓄せざるべからず(イ)。殊に信仰の增進といふとは即ち此點にあり。抑も諸君が初めてイエスを受領せられたるは其聖語のイエスは汝のものなりてふ保證を信じてなり。されば諸君は尙ほ一歩を進め、イエスにある凡てのものは文字的に眞實に諸君のものにして、諸君の生命たらしむるため、天父の與へ給ふ所なるを滿腔の信仰となさゞるべからず。諸君が最初にキリストを受くるに至りたる動機は、諸君の欠乏と必要

即ち是れなるべし。然るに聖靈は諸君をして心靈上益々貧しきものたらしめ給ひ、事に當る毎に、時に臨む毎に一層イエスを要すると切實となりぬ。是れ即ち諸君をして屈せず、撓まず、諸君の凡てとしてイエスを受領せんと奮發せしむる基にぞある(ロ)。

太五〇(ロ)　三三、十三、十、後哥　四〇、十六、同六十　四四、十〇、十弗　四六、二十〇、五十

諸君の最初にイエスを受くるとは、其未だ目見ると能はず、手觸るゝと能はざるものを信仰によりて我有とするとに外ならず。諸君此の信仰を貫かんと欲せば、絶えず斯くいふべし、曰く我がイエスに於て見る所のものは皆我がためのものなり、我れ未だ實驗するに及ばずと雖、我は我有として之を受領すと、蓋し神の愛は交通なり、絶えず我等の靈魂に生命の光を注ぐとなり、極めて有力に、極めて眞實にイエスを與ふるとなればなり、亦吾人の生命は絶えずイエスを思念し、絶えずイエスを受くるとに外ならざればなり(ハ)。

約一〇十六、四二十九、〇同三、三〇

以上は即ち神の子として此世を送るの方法なり。イエスは誰彼に論なく大凡そ己れを受くるほどのものには、即ち必ず神の小供となるの能力を與へ給ふ。是れ獨り改悔の時、亦更生の時に然るのみならず、吾人日常の生活に於ても亦然るとなりとす。余若し何事も神の子として之を行ひ、以て我天父の面影を發揚すべきものとすれば、余は是非とも獨子なるイエスを受領せざるべからず。余をして神の子たらしむるものは即ちイエスなればなり。イエスを我有となし亦イエスに滿ちたる思ひと行ひを我有となすは即ち是れ神の子として此世を送るの途なり。余

太五、五〇
九十四、十六
四十四、四十五
羅八、〇十
四四、弗一
〇四、五
同一、五
二一、二〇
五〇、來二十
〇十、彼前
一〇、十
四一、十七
約一、壹三
五〇、同
三一、十〇

は聖書を繙き神の子たるものゝ一切の特質を知得せり(二)。而して余は此等の語尾に必ず書していふ、此イエスを有すと。

我が中に働き給ふべし、余は余をして神の子たらしめ給ふイエスを有すと。

愛する弱年の信徒諸君余は諸君に懇願す、眞正なる基督信徒たるとの簡單にして亦光榮なるとを解せらるゝに至らんとを。是れ他なしイエスを受くるにありイエスを圓滿に受くるにあり、天父が諸君にイエスを與へ給ひし凡ての光榮なる關係に於てイエスを受くるにあり、諸君願はくはイエスを受けて諸君の預言者とし、諸君の智慧とし、諸君の光とし、諸君の嚮導者とせよ。諸君願はくはイエスを受けて諸君を新たにし諸君を潔め、諸君を聖くし、諸君を神に近かせ、諸君を取りて全く之を其用に協はせ給ふ諸君の祭司とせよ。諸君願はくはイエスを受けて諸君を支配し、諸君を保護し、諸君を祝福する諸君の王とせよ。諸君願はくはイエスを受けて諸君の首とし、諸君の摸範となし、諸君の兄となし、諸君の生命となし、諸君の悉皆とせよ。神の賜物は諸君の靈魂に對する神聖なる進歩的なる有効なる交通なり。諸君願くは神の與へ給ふものを受け、圓滿のイエスを受け、又其一切の恩寵を受くるに口を開き心を開き宜しく小供の如くなるべし、宜しく快活なるべし、決して怠慢なるとなかれ。神は何等の祈禱にも答へていふ、萬事はイエスにあり、イエスにある萬事は皆諸君のものなりと。諸君願くは又之に應じていへ、我はイエスにありて萬事を有すと。諸君は『イエス、キリストを信ずるに由て神

の子』たり、又諸君は『イエス、キリストを信ずるに由て神の子』として萬事に處するを得るなり。

父なる神よ願はくはわが心の眼を開きて我の神の子供なることを覺えしめ主の獨子イエスを信ずる信仰に由て常に神の子供の如き生活を送る道を敎へ給へ　願はくはイエスに對する信仰信任平安服從をして我靈に滿さしめ給はんことを　アーメン

諸君神の恩寵に由りて今已にイエスを受けたるとき、神の子たるとゝさを知らば神の救ひを人に知らしむるの勞を執らざるべからず。世上神の子たるべき途を知らんと欲して未だ之を發見する能はざるもの多し。

斯る人に對して宜しく左の二事を明知せしめんとを努めよ。第一新たに生るゝとは至高至聖の業にして、吾人の一指だも加ふる能はざる所なり。されば新たに生れんと欲するものは、聖靈に由りて神より永生を受けざるべからず。又上より生れざるべからず。是れイエスの敎なり（約三〇一―一八）。第二に明知せしめざるべからざるとは神は如何ばかり謙りて此の新しき生命を携へ、人の間に降り給ひしが、亦如何ばかり近く吾人に親らし給ひたるかさいふと是れなり。イエスの中にはイエスを信ずる凡ての人に與ふべきの生命あり。是れ亦イエスの敎なり（約三〇十四―十八）。而して此のイエスさいひ、此の生命さいふもの共に神の道の中にあり。されば

卑しき人に告ぐるに神の道を受くるものはイエス及び道の生命を有すといふことを以てせよ。（羅十〇八）。嗚呼、願はくは吾人の神の子となるは只イエスを信ずるに由るてふ福音を宣傳するの勞を吝むとなかれ。

第九章　イエスに對する吾人の捨己

『神の意旨に循ひ己を主に仕へたり』―哥後八〇五

イエスが我が爲めに既往に於てなし給へるとも、亦現在なし給ふとも其眼目とする所は我が爲め己れを捨つるといふ一事にあり。亦イエスが我をしてなさしめ給はんとする眼目は、我をしてイエスのため己れを捨てしめんとするにあり。イエスに己れを献げたる青年信徒にあり て其極めて大切なる一事は常に此の捨己を確守し、丈夫にし、更新するにあり。されば日々更めて斯くいふべし、『余はイエスに從ひ、イエスに事

ふるため、一身をイエスに献げたり(イ)。イエスは我を取り給へり、我はイエスの有にして亦全くイエスに事ふべきものなり』と。是れ特別なる信仰の生涯なり(ロ)。

弱年の信徒諸君よ、願くは諸君の捨己を堅守し、之をして常に益々堅からしめよ。諸君己れを捨てたる後に於て或は蹉跌し或は罪を犯すとありとも、之がため、我が捨己は眞實ならざりしと思ふ勿れ。然り捨己は善事なりといへども一旦にして能く人を完全ならしむるものにあらず、諸君の罪を犯せしは、其身を主に委ね奉ると未だ全からず、亦充分堅固ならざる所ありし爲なり。されば耻を忍んで、宜しく其捨己を守れ。『主よ汝は我を主に献げ奉りしとを知り給へり、我は即ち主の有なり』(ハ)。諸君

イ 太四、〇二十
ロ 〇廿二、〇四十
ハ 七、五、八、八、二、二、五、十哥後五、太二〇二十八
路三、三十、路二十、約二十、約一十、約廿一、〇十七、
加六、〇一、撒前五、〇廿四、提十、後廿四、三、約二十、壹十六、路二十、腓三十、路二、八、〇七、八、

此の捨己を更めて日々に之を堅うせよ。又イエスに告ぐるに今日捨己の全からざるべからざる所以を一層明かに知り得たりとの事を以て、更に惜む所なく、殘す所なく、分つ所なく日々全く己れをイエスに献くべし(ニ)。

吾人基督信徒たると愈々久しければ即ち己れを捨てゝイエスに献げよてふ言の味を知ると益深し。即ち吾人は未だ全く之を解せず、未だ全く其味を嘗はざりしとを悟ると、日一日より明白ならん。捨己は特別に愈々圓滿なるものとなり、愈々信任的のものとならざるべからず。昔しアハブが『王我主よ汝の言の如く我と我有つ者は皆汝の有なり』(王上二十〇四)といひつる言は、亦吾人の言ならざるべからず。所謂る我と我有

つ者は皆汝の有なりとは、げに圓滿無欠の献身の辭なり。諸君願くは一物をだも取り遺す勿れ、一個の罪といへども之を取り遺して或は告白せず、或は忽諸にするとあるとなかれ。精神の革變なきものは捨己ある能はず(ホ)。又一個の餘力をも取り遺すなかれ。諸君が腦髓の思想、諸君が口舌の辯、諸君が心の感情、諸君が手の伎倆、其他諸君の時間、諸君の名譽、諸君の權勢、諸君の財産、一切剩す所なく、之を神壇の上に置け(ヘ)。イエスは此の凡てのものを要求するの權利ありて、其全部を要求し給ふ。諸君願くは、己れと己れの有てるものを悉く主に献げ、其嚮導と其使用と其保存と、其潔めと、其祝福とに任かせ奉れ。『王我主よ汝の言の如く、我と我有てるものは皆汝の所有なり』

太一七、〇二
十七、〇二
三十一、〇提二
十二、二約
一九、二
羅六、〇
三二、一同二〇
哥役〇、五十十十
二五十十
〇、三五
五彼〇、
、前十來〇

是れ信任的献身の辭なり。諸君が己れを捨てゝ主に献げたるは主諸君に命じて己れを捨てよといひ給ふ言に基くものなり。此の命令の言こそ、主が諸君を受け、諸君を導き、諸君を守り給ふべきの擔保なれ。諸君若し己れを献ぐること確實ならば主必ず、諸君を取り給ふべし。而して主は其取り給ひしものを守り給ふの力あり。吾人は再び其御手より之を取り還さんとするとなかれ。諸君願はくは覺悟せよ、諸君の捨己は非常に主の聖意を喜ばせ奉ると為るを。又願くは確信せよ諸君の献身はいと馨ばしき香たるとを。こは決して諸君の現狀に由るにあらず、又諸君が己れ自ら經驗し或は發見するものに價値あるが故にもあらず、唯神の言に基て之を言ふのみ。神の言によるに諸君の献ぐる所は主の受け

（ト約十〇廿八、撒後三〇三提後一〇十二、）

給ふ所なり、主の受け給ふ所は亦その守り給ふ所なり。諸君之を信じて意を安んじて可なり（ト）。されば諸君日々新たに己れを捨てゝ神に献げ之を諸君が信仰の生涯の一動作となし、嬰兒の如くに喜ぶべし。諸君願くは己れを捨てゝイエスに献げ、亦断絶あるとなかれ、果して然らんにはイエスは其愛によりて諸君を受け諸君を確握すると確實なるべく、又諸君献身の應酬としてイエス自ら更めて常に一層深く諸君の爲め己れを捨て給ふべきなり。

我主よ我王よ主の聖語に從へば我と我有てるものは皆主の有なり
我は我有にあらずして主の有なりとの信仰を日々堅くし奉るべし
願はくは主の有を全く取給ふて我は誰のものなるかを他人に疑はしめざらんことを切に希ひ奉る　アーメン

一　諸君今一應與へると受くると有つてふ言を咀嚼せられよ。我がイエスに與ふる（献、くろ）ものは、イエス之を神聖に受納し給ひ、又其の受納したるものは、即ち之を有ち給ひ、隨つて亦之を守り給ふ。されば我一旦献げし所のものは、最早全く我有にあらず、故に我は之に未納を遣すが如きとあるべからず、亦恣まに之を處分することを得さるものなり。願くば『イエス我を受けイエス我を有ち給ふ』てふ祈禱の言をして諸君の信仰たらしめよ。

二　諸君若し疑惑暗迷の時に掩はれ、之が爲め、主諸君を受けたりさ

の信仰、烏有に歸せんとするか如きあるも、自ら損ずして失望に陷ぬるが如きもあるなかれ。唯躓人のまゝにて主の許に來り、以て己れの躓を告白せよ、主は己れに來るものを決して捨つることなしとの約束を信せよ、亦約束に基づきて我は主の我を受け給ひしを信ずと言はんとするものを捨て給はざる約束を信ぜよ。

三　捨己の眼目たるものを忘るゝなかれ、捨己の眼目は己れをイエスに献げ、又其愛に献ぐることなり。己が捨己の動作に着目するとなかれ、唯諸君を招ぎ、諸君を受け、諸君の爲めに萬事を爲し給ふイエスに着目せよ。是れ諸君の信仰をして堅固ならしむる所以なり。

四　信仰は常に捨己なり。信仰は見へざるものを見るの目なり。余物を見る時は、我の我たるを忘れ、其印象即ち我を全領す。又信仰は神の聲を聞くの耳なり、余、音信を接けて之を信ずる時は、即ち我の我たるを忘れ、其音信の我に及ぼす喜憂我を全領す。又余イエスを信ずる時はイエスをして其神より我に與へられしものたらしむるため、將た又其爲すべきを爲さしむる爲め、即ち我の我たるを忘れ思も、願も、望も皆イエスに献げ奉るなり。

第十章　罪の救主

『其名をイエスと名くべし蓋はその民を罪より救はんとすれば也』――太一〇廿一

『我儕の罪を除かんが爲めに主の現れ給ひしことは爾曹の知ところなり彼また自ら罪なし凡そ彼に居る者は罪を犯さず』――約壹三〇五、六

吾人々類艱難の原因は罪なり。神の怒を激し、其呪詛を人類の上に來せしものも亦罪なり。神は至らざる所なきの憎怨を以て罪を憎怨し、あらゆる手段を盡して之を剪除せんとを望み給ふ(イ)。神が其御子を與へ給ひしも、イエスが己れを與へ給ひしも詮する所、罪を除かんとするあり(ロ)。我等をして刑罰と呪詛を免かれ不安と恐懼を脱せしむるのみならず、併せて亦罪より釋されしむるものは蓋し神の力に是れ由る(ハ)。『我儕の罪を除かんが爲めに主の現れ給ひし事は爾等の知る所なり』。諸君願はくは吾人の罪を除くものは、即ち神なりとの一事を深く其心に銘記せよ。吾人此の一事を知ること愈々明かなれば、一生の幸福益々多からんとす。

然るに衆皆之を思はず徒らに罪の結果を免かれ、恐懼と暗黑と罪の應報たる刑罰を脱せんとするに汲々たり(ニ)。其の眞正なる安心立命の地

イ 申廿七、二十六、賽五十九、〇一二、耶四十一、〇四、十羅
ロ 八、一〇、十
ハ 加一、二〇、四、弗五、〇廿五、二十七、彼前二、〇、二十四、約壹三、〇、八、耶二十七、〇九、彼前一、〇、十二、十五、同十六、二、〇、十四、約壹三、〇、八

に到達する能はざるも亦理りなり。彼等は救とは罪より脱するとなるを解せざるなり。吾人請ふ、確く此理を信ぜん。イエスは罪を去りて人を救ふ。此に於てか吾人の學ぶべきと二あり。

創二十七〇三、十四、三十八、賽五十五、六、六〇二、雅四十約〇六、三

第一は有らん限りの罪を携へてイエスに至ると是れなり(ホ)。諸君は身を以て主に献げ奉りし後、よし罪の攻撃を受け、其歴制する所となるとあるも、之が爲めに失望することなかれ、又我が力のみを以て罪を除き、罪に勝たんと努むるが如きとあるとなかれ。あらゆる罪をイエスに携へ至れ。イエスは罪を除かんが爲めにとて、神の立て給ひしものなるぞかし。而してイエスは已に十字架上に於て、滅無に歸せしめ、又其力を挫き給ひしぞかし(ヘ)。諸君をして罪より自由なるものたらしむるは主の

詩八〇十五、路二十三、同七十八、約一十八、十一、同四十六、三三十六、〇九、〇七、同八十九、十八、〇十、約八十、〇一、同四十六、三三十

來九〇二十六

事業なり、主の志願なり。果して然らば、あらゆる罪を携へて主の許に至るとを怠たるなかれ。罪は諸君の不倶戴天の仇なり、諸君之をイエスに告白し、且之をイエスの御手に委ね奉らば、諸君は確かに罪に勝つを得べきなり(ト)。

羅四七、九、同〇、二、八〇、哥後九十二、撒〇、後三、二〇

次に第二點を説かん、諸君請ふ堅く之を信ぜんとを努めよ。即ちイエスは罪の救主にしてイエスの外に救主のあるにあらざるを了得せられよ。イエスの助けによりて罪に勝たざるべからざるものは、諸君にあらず、却てイエス自らなり。即ち諸君の中に在す所のイエスなり(チ)。諸君斯くして罪の羈絆を脱せんと欲し、又圓滿の救を受けんと欲せば常にイエスと親密なる交際を繼續するを諸君生涯の務とせよ。諸君誘惑に陥

申八〇十、七十八、詩四十八、〇四十約十六、三〇、約壹五、三〇、四

哥前十五、十二、○十、○加二、○十、○十、○三、○四、○三、○三、出二十九、○四、三、○約十、五、○四、羅八、五、○十、弗十、三、○十、七、十八、

りて而して後倉皇イエスに歸らんとするの醜態を演ずるなかれ。却て事前に常にイエスにあるとを諸君の生涯とせよ。イエスに親炙し奉るとを諸君唯一の志願とせよ。イエスは罪より救ひ給ふ、イエスを有つとは取りも直さず罪より救はるゝとなり(リ)。吾人願はくは間違なく此理を了解するを得んとを。又イエスは啻に罪より救ふとを以て時々刻々に吾人の中に爲させ給ふ事業とするのみならず、亦實に救を吾人に與へて、イエスが吾人に對する、又吾人に於る祝福と爲させ給ふなり(ヌ)。イエス我に滿ち給ふ時、イエス我が凡てと成り給ふ時、罪は我が枷にあらず、『彼に居るものは罪を犯さず』。然り、イエスだに在さば、罪は逐ひ出され、又〆め出さる。我が爲めに其身を捨て、我が中に生き給ふて我を罪より救ふものは即ちイエスなり、イエスの外に又一人だもあるとなきなり。

主なる神よ願はくは主の聖光をわが上に照し主の救主なることを示し給へ　主を我と偕に我裏に保つことに由て我を罪より免かれしむ　願はくは凡ての罪を聖許に携へ到り罪を犯す毎に猶ほ近く主の聖前に進ましめ給へ　然らば主イエスの聖名は眞にわが救濟となるべし　アーメン

一　信徒が常に罪の自知力の發達するは、如何ばかり切要のとなる

かを思ひ見よ。我が知らざるの罪は之をイエスに携へ至るに由なく、我がイエスに携へ至らざる罪は、我より取り除かるゝに由なければなり。

二　罪を知ること益々明かならんとするには、左の諸件必要とす、

不斷の祈禱『我を試み我不義と我罪を我れに知らしめよ』(伯十三〇廿三、詩百卅九〇廿三、廿四)

銳敏の良心　即ち聖靈によりて示さるゝまに〳〵罪を認めざるべからず、蓋し神は又此目的のため良心をも用ゐ給ふべければなり。

謙遜の捨己　己れを捨てゝ聖語に從ひ、徹頭徹尾神の思想を以て己が罪を見ること。

三　罪の自知力の發達は、左の諸結果に顯はるべし、曰く、

吾人が前に罪さしも思はざりしとを此光明を得てより後は其罪なるを悟るに至ること。

吾人は愈々益々罪の甚しきとと其惡むべき性質のものなるとを認識するに至ること。(羅七〇十三)

吾人外部の罪に勝つに從ひ、勇氣益加はりて我本性の深重なる罪惡と、我神意に背ける肉慾の罪惡に勝たんとする念を生ずること。而して後は、吾人私に善人たらんとし、若しくは善を行はんとするの野心全く亡せ、只聖靈に任せて信仰の生涯を送らんとするに至るべきなり。

四　嗚、吾人なしてイエスの罪の救主にて在すとを熱心神に感謝せ

しめよ。曾て罪が吾人の上に有したりし權勢は、イエス今之を所有し給ふ。曾て罪が君人の心に占めたりし地位は、イエス今之を占め給ふ。『キリストイエスの裏に在る生る聖靈の法は我儕をして罪と死の法より離れしむ』

第十一章　罪の告白

『もし己の罪を認はさば神は信實なる公義者なるが故に必ず我儕の罪を赦し諸の不義より我儕を潔むべし』―約壹一〇九

出一六、五四十、四十六、三廿四、三六、十三、十六、十七、六〇、六〇、六〇

士師十、十五、〇
十六、十七、哥〇
後十四、〇六、喇〇
尼二〇、三、同
九十〇二、
耶三十〇三、
十一、〇二、
十五、但
九〇四、
五、二十、
利六、〇二、
一〇、數
五十〇七、母
後十二、〇詩
三十三、詩三

諸君初めてイエスに來りし時、已に、幾分か此理を知らん。然れども諸君は一層深く此理を解せんとを努めざるべからず。只一言此の罪に關して諸君に忠告すべきとは、之を取り除くとを得給ふ御一人即ち神自ら に日々之を携へ往くと是れなり。神の子の最大特權の一は罪の告白なると諸君亦之を知らざるべからず。罪を燒き盡すとを得るものは獨り神の聖德あるのみ、されば我は告白によりて我罪を神の手に渡し、之を神に委ね、之を神に任せ、之を罪を燒くと猶ほ猛火の如き神の聖愛の熱爐に投ぜざるべからず。神は罪を取り除き給ふ、然り神自ら取り除き給ふ、只神のみ取り除き給ふ(八)。

基督信徒たるもの常に此理を是れ解せず、或は罪を隱蔽せんと欲し、或

十、二〇、五、同三〇、十八、〇十、同五、十九、十一、五、〇九、
創三、〇出、
三十二、二十二、二〇、二十四、賽一、十五、十三、〇、路二、十六、
民十二、〇十一、同

は之を輕減せんと欲し、或は神に近かんが爲に之を根絶せんと欲する天性的傾向を有す。亦其罪を隱蔽するに、或は己が悔改と廉耻心とを以てせんとし、或は嘗て受けたる誘惑を拒絶したるの功を以てせんとし、或は又其已になしたると、若しくは今後將に爲さんとするとを以てせんとす(二)。弱年の信徒諸君、諸君若し完全なる赦罪の喜を味ひ、罪の神聖なる潔めを得んと欲せば、須らく適法に罪の告白をなすべし。眞正なる罪の告白は神の子たるものゝ最も幸福なる特權の一にして、且つ又有力なる精神的生命の一淵源なり。

此の目的を果さんと欲せば、諸君は其告白を規律的ならしめざるべからず(ホ)。連日漫然其罪を告白するとは、害あるも、寧ろ益尠なし。其告白す

(一)廿七、一〇 母後
(二)廿四、十七、〇 十
(三)十五、十九 賽
(四)十二、〇 十
(五)十三、〇 路
(六)十一、〇 徒
(七)十、十九 八
(八)十九、〇 十
(九)同二十、十二 同
(十)二十、九 提
(十一)前一、〇 十
(十二)三、十五 箴
(十三)〇十二、二十八 箴
(十四)〇四十一、十六 利
(十五)〇十八、一 耶
(十六)〇十九、

べき所を知らずして之を告白するよりは、我れに告白すべきものあらずと神に告げ奉ると遙に善し。されば之を規律的にするには先づ一の罪より初め、此の罪に就て神と諸君の間に寸隙なき調和に達せしめよ。又此の罪は告白に由りて最早神の御手に達せしものなりとの安心を懷く樣にせよ。若し然らんには斯る告白に力と祝福の象備せるとを實驗すべきなり。

其告白をして正直ならしめよ(一)。此の告白によりて有罪の行爲を一切委棄放擲せよ。此の告白によりて有罪の感念は一切神に任せ奉りしと心得て放擲せよ。告白は又放棄を意味す。罪を棄つるとを意味す。罪は之を神に奉れ、神即ち之を諸君より赦し、又之を諸君より潔め給ふべし。

(一)母後十二、〇十三、詩三十二、〇五、五十五、〇賽七、
(二)約壹五、〇五、同二、〇十二、

されど若し何等の準備あるにあらず、又之を釋されんとの衷心の志願あるにあらずんば、諸君之を告白するとなかれ。告白は神に罪を引き渡すに至りて初めて價値あり。

其告白をして信任的ならしめよ(二)。神の實際諸君を赦し、又諸君を罪より潔むべきとを確信せよ。諸君が脫離せんと欲するの罪は、宜しく間斷なく之を告白し、之を神の聖德の熱火に投じ、神已に之を取り給ふて、之を赦し、之を潔め給へりとの確信其靈魂に湧起するまでに至るべし。大凡そ眞實に世と罪とに勝つものは蓋し斯る信仰なり、即ち神イエスに於て眞實に罪より我を赦すとの信仰なり(三)。

兄弟よ、諸君は今已に此理を了解せられたりや否や。諸君は罪即ちわら

ゆる罪に對して如何なる措置をなさゞるべからざるか。曰く告白に由りて之を神の許に携へ往くにあり、亦之を神に委ぬるにあり罪を取り除き給ふものは只神あるのみ。

主なる神よわが罪を犯せしまゝ主の聖前に來り得る宏大なる御恩寵を深く感謝したてまつる　主は我等が己の罪を携へて主の聖き御許を出る時は如何許り恐懼と戰慄を生ずるかを知り給へり　主は我等に先づ己が罪を蔽ひかくし然る後ち善を爲んとの希望と勉勵とを以て初めて主の聖前に出んと欲する念慮あることをも知り給へり　主よ願はくは凡の罪を主の聖許に携へ至り之を告白して主の聖前に投げ棄て罪より免るゝことを教へ給へ　アーメン

一　神の罪を蔽ひ給ふとき、人の自ら罪を蔽ふとは、其間に何の區別ありや。如何にして人は之を蔽ふや、又如何にして神は之を蔽ふや、

二　罪を告白するに當りて、其途に存する大妨礙は何々ぞや。曰く罪を知らざる事
罪を携へて聖き神の御前に到るを恐るゝこと。
何物か善なるものを携へて神の御前に至らんとする心配。
實血の力と恩寵の聖がなるを信せざること。

三　我は背約僞冒若しくは過冒を直ちに告白せざるべからざるか、但しは亦我が感情沈靜し、若しくは常態に復するまで之を見合す

も可なるか。曰く、諸君願はくは直ちに之を告白せよ、罪に滿ちたる僅、にて神の御許に至れ、初めより之を輕減せんことを望なかれ。

四　又人の前に之を告白するは、必要にして且つ善き事なるか。然り、其罪若し人に對して犯さるものならば、之を人の前に告白せさるべからす。加之、又往々にして善き事なり。然れども亦我かなせしとを識認するは、之を人の前に於てするよりは、却て神の前に於てすることの容易なるとも往々あり。(雅五〇十六)。

第十二章　罪の赦

『その愆をゆるされその罪をおほはれしものは福ひなり』――詩三十二〇一

『わがたましひよエホバを讃めまつれ……エホバは汝がすべての不義をゆるし給ふ……』――詩百三〇、二、三、

人己れを捨てゝ之を主に献げ奉れば、之に對する神の恩寵の第一大祝福は他にあらず、諸君の一切の罪は、價なしに完全永遠に赦さるゝと是れなり。されば、躬年の信徒にありて最も緊要なる一事は堅く己が罪の

詩百三十二篇八節
一〇三
十三
十七
五十七
七五
〇十
十九
十八
十八
十六
米來
同〇
耶三十一
〇來八卅四
二、八、
十、十、
七同〇
十、十、

赦されしことを確信し常に此の確信を失はざるとにそある。尙ほ此目的を達せんと欲せば特に左記の眞理を熟考せざるべからず。

吾人の罪の赦しは完全にして遺漏なきの赦しなり(イ)。神は半ばを赦して半ばを赦さゝるが如きとあるとなし。人間に於てすら吾人半赦を眞正の赦罪とは思はず。況して神の愛は非常に廣大にしてイエスの血の贖は非常に完全に非常に有力なれば、神は常に全部を赦し給ふなり。諸君願はくは其罪の一切皆拭ひ去られしことを合點するまで、神の言を熟讀玩味せよ。神は毛頭また諸君の罪を介意し給ふことなし。『我れ彼等の不義を赦し其罪を亦思はざる可し』(ロ)。

吾人の罪の赦しは吾人をして完く神の愛に復歸せしむ(ハ)。神は此上吾人に罪を負はせ給はざるのみならず――こは僅かに救の半面たるに止まる――亦イエスの義を以て吾人に加へ、之に由りて吾人はイエスと等しく神に愛せらるゝなり。されば神の怒りは吾人より取り除かるゝのみならず、亦圓滿の愛今や吾人の上にあり。『我思ふまゝに彼等を愛せん其は我が怒彼等より離れたればなり』。赦罪は神の凡べての愛に近づく道なり。此を以て赦罪はまた贖罪の諸他の祝福を紹介するものなり。

何十四〇
路十二
五〇二
二十徒
十六〇
八羅
一、五十
〇五、

諸君願くは赦罪の確信にありて此世を送れ、聖靈を其心に滿たし、其保證と祝福を受けよ。されば諸君は神より萬事を賜はるとを望むの大確信を有すべきなり。諸君聖靈の佑助により、神の言を學びて神の言を正

詩百三〇、二三、三〇十、羅一賽十五、同五、八〇二、〇七、弗三一十、〇五、

約十四、三〇十、五二〇、羅十十、哥前六一、弗五〇、二〇廿五、十六、

確に明らめ、又神は常に罪を赦すものとして之に信頼するとを努めよ。是れ即ち神の名なり、亦神の榮光なり。多くの罪(否寧ろ悉皆)を赦さるゝものには神亦多くを與へ給ふべし。否凡てを與へ給ふべし(二)。此を以て諸君日々喜んで感謝せよ、『オー我が魂よ我が凡の罪を赦し給ふエホバを讃めまつれ』と。其時罪の赦は新生活の力となり、『多く赦されし者は其愛も亦大なる』べきなり。活ける信仰にありて、日々新たに受くる罪の赦しは吾人をイエスと、イエスの役務とに繋ぐ新らしき繋ぎなるぞかし(ホ)。

斯くの如く過去の罪を赦さるゝとは常に人の元氣を皷舞し、新たに罪を犯す毎に必ず馳せて神の許に至り、信じて其赦を乞ふの念を起さしむべし(ヘ)。されど願くは左の一事を記せよ、曰く、赦罪の左券は記憶にあらず、諒解にあらず、却て是れ生活の實果なり、言を換へて之を言へば、赦しの父及び救主なるイエスと活ける交通をなすとなり(ト)。我曾て赦しを受けたりと知るとは未可なり、神の愛にありて生活し、信仰によりてイエスと活ける交通をなさば罪の赦は常に新たに常に力あり、我靈魂此に於て平喜あり、亦生氣あるを得ん。

多二〇十、一四彼前十、七、十八、

出三十四、六七、〇太十八、〇二十一、路一〇七、十七、十八、

弗二〇十、三十八、腓三、九、四一〇、二、一、二十一、

主なる神よ主は我儕の罪を赦し給ふ神に在し給ふ御恩惠ぞ誠に深く感謝し奉る　願はくは斯る主の榮光ある愛を日々新たに敎へ給へ願はくは聖靈を以て罪の赦しを印せられ之を永遠に常に活て能ある

恩惠となし我が生涯をして感謝讃美の生涯たらしめ給へ

『わがたましひよエホバを讃まつれエホバはなんぢがすべての不義をゆるし給ふ』　アーメン

一　究竟の意味に於ては、赦罪（フォルギブネス）と稱義（ジャスチフィケーション）とは同一事なり。赦罪とは神を一層多く父として見たる言にして、稱義は即ち審判者としての神の赦しに重きを置きたる言なり。弱年の信徒にありては、稱義といふよりも赦罪といふ方、稍〻解し易かるべけれども、さりとて亦稱義てふ言の意義をも了解し、且つ聖書の之に關する教訓の幾分を悟らんとを努めざるべからず。

二　稱義に關して吾人の知らざるべからざると左の如し

人は其れ自身に於ては全然義しからざるものなると。

人は其行に由りて義させらるゝと能はず、換言すれば神の法廷に立ちて義と宣告せらるゝ能はざると。

イエスキリスト吾人の代りに義を濯らし來りたると。キリストの從順は即ち吾人の義なり。

吾人信仰に由りてイエスを受け、イエスと一躰となる時は初めて神の前に義と宣告せらるゝと。

吾人は信仰に由りて此の左券を握り、而して義させらるゝ時は即ち神の前に近づくを得ると。

イエスと一躰となるとは、是れ吾人か義と宣告せらるゝの生活

たるのみならず、亦眞に義にして義の行をなす生活たるも。

三　稱義につき、罪の赦しにつき、將た又神の愛に復歸したるとにつき、諸君の握れる左券をして、諸君が神に近づく日々の信仰たらしめよ。

第十三章　罪の潔め

『若し我等光の中を行がば其子イエスキリストの血諸て罪より我儕を潔む若し己れの罪を云ひあらばさば神は眞實なる公義しき者なるが故に必ず我等の罪を赦し凡ての不義より我儕を潔むべし』―約壹一・七、九、

罪を赦し給ふ其神は亦罪を潔め給ふ。而して潔めは赦罪と等しく即ち神の約束にして、隨つて亦信仰に屬するものなり。潔めは人の必要とする所、而して亦人力の如何ともすべからざるものなれども、赦罪と等し

く、確かに神より得らるべきものなり。

さて此の所謂る潔めとは、果して如何なるものぞ此語の出所は舊約聖書にして、赦罪の罪人に對する放免の宣告なるに反し、潔めは罪人の身上、及び其の心中に起りし或る事件を指す。赦罪は神の言を經て罪人に來り、潔めの場合に於ては罪人の自ら實驗するを得る事件、其心に起る(イ)。此故に潔めは亦吾人に對する神の能力の心内的默示にして之によりて吾人は不義より放釋せられ、又罪の汚辱罪の影響を脱するなり。吾人は潔めによりて清淨心てふ祝福を賜はる。此心の中にありて聖靈即ち吾人を聖め我等の中に神を默示すとて其運動を終りまで一貫す(ロ)。

潔めはイエスの血の力に是れ因る。赦罪と潔めは共にイエスの血の力

利十三、〇
イ
十三、十四、〇
同十、八、
七、九、〇
十、二、同
十一、〇
十三、二
十四、二
十、十二、毋
後二、〇
二十、二
十、十二、
五、一、
五十、代下
十、〇
尼

に是れ因るなり。イエスの血は天に於て吾人を罰する罪の力を粉碎するものなり。又イエスの血は吾人を擒にする心中の罪の力を粉碎するものなり。イエスの血は天にありて絶えず働き、時々刻々間斷あるとなし。之と等しくイエスの血は亦絶えず吾人の心中に働きて之を潔くし且肉を犯して侵入せんとする罪を防遏して其純潔を全ふせしむ。イエスの血は真心を潔めて死せる行爲を離れ、活ける神に仕へしむ。イエスの血は天に於て奇能を有する如くに、吾人の心に於ても亦之を有す(ハ)。

潔めは亦神の言に是れ因る。蓋し神の言はイエスの血につき亦神の力に就て立證すればなり(ニ)。此を以て潔めは亦信仰に是れ因る、潔めは亦より神の潔めにして、有効疑ひなしといへども其能く實驗するとを得

三十、同
十八、〇
十一、二
二十五、詩
二十一、〇
四、島
三、〇
〇
隣五十
七、〇
十三、同
一、
太五、〇
八、提
〇
前一、
五、提
二、〇
二十、後
二、彼
一、〇
約十三、〇
十、來
九、〇
四、同
二、〇
一、約壹
〇
七、

約三十四〇三

詩二十三、二〇　約三十五、三〇　晉後一、二　約二十二、二〇　提二十七、二〇　提二十前、二〇　後十四、二〇　雅四、二〇　約三、一八　壹

又感覺することを得るは、信仰によりて之を受けたる後ならざるべからず。されば余倘ほ肉に於ては罪を感ずるとありとも余は已に神の潔めによりて潔められたるを信ず。斯くの如く此の祝福を信ずる時は潔めは即ち我が日々の經驗たるべきなり。

潔めは時として神即ち主イエスに歸せらるゝとあり、亦時としては人に歸せらるゝとあり(ホ)。是れ蓋し吾人を潔むるために吾人を働かせ、之に由りて神吾人を潔むればなり。イエスの血によりて罪惡に誘ふ肉慾は粉碎せられ、罪に拮抗する力の確信作興せられ、斯くして志望と意思また生氣を發し來る。嗚呼、此の理を了解せし人は幸なる哉此人自己の力に依頼して、己れを潔めんとするの徒勞を免かるべし、是れ之を能く

詩十九〇十三、太五〇六、

するものは只神なるとを知ればなり。此人亦失望に陷ゐるとを免かるべし、是れ神の確かに之を爲し給ふべきを知ればなり。

此故に吾人が今重きを置くべきと二あり、一は志望にして、一は潔めを受くると是れなり。志望は眞實の潔めを受くるとに熱衷せざるべからず。救罪は畢竟聖なる生活の門戸のみ。初歩のみ。神に事へ奉るとに進歩するの秘訣はあらゆる罪より脱離するとに熱衷し、飢ゑ渴く如く義を慕ふにありとは、是れ余の屢々論じたる所なり(ヘ)。斯くの如く熱衷する人は幸なる哉。斯る人々は必ず神によりて潔められるゝとの約束を解し、且つ之を受くべきなり。

又斯る人々は信仰によりて、熱衷すとは何事なるかを了解す。即ち信仰

ト五〇二
十六、多
二〇、十
四、

によりて、不可見的精神的、屬天的なれども而も亦眞實なる血の潔めは神のなさせ給ふ所なるを知るなり。

神の愛子よ。吾人が曩きにイエスの其身を献げ給ひしは、即ち吾人を潔めん爲めなりしを觀察したるは諸君尚ほ記憶せらるゝべし(ト)。乞ふイエスをして亦主なる神をして諸君を潔めしめよ。諸君は此等神の潔めの約束を有するものなれば、宜しく其身を潔めよ。諸君願くは諸ての罪は其赦されし時に亦潔められしものなるを信ぜよ。さらば必ず諸君の信仰の如く諸君になるべきなり。諸君が神を信じ道を信じ、イエスの血を信じ又イエスを信ずる信仰をして絶えず倍增せしめよ。『神は眞實なる義しきものなるが故に諸ての不義より我儕を潔む』。

主なる神よ主は惟にわが罪を赦し給ふのみならず又之を潔めんとの約束を與へ給ひし御恩寵を感謝し奉る　主は初めに罪の赦を確に授け給ひしが如く罪の潔めも亦之を望み之を信ずる者には必ず與へ給ふべし

主よ主の聖語を深くわが心に透徹せしめ既に赦されし凡の罪を又潔め給ふことを堅く信ぜしめ給へ　愛する主よ聖靈を透して斷へず來る主の血の榮光ある潔めを識り之を常に受しめ給はんことを　アーメン

一　神の潔めと人自らの潔めとの關係如何

二　約翰壹書一〇九節によれば、潔めの前にあるべき二の事は何ぞや。

三　潔めは救罪と等しく吾人の中に爲し給ふ神の業なるか。若し果して然からば、之を神に一任し奉るとは、盲ひ盡されぬほどに大切のことなり。神我を救し給ふ時に、血の潔めをも我に與ふるとも信ずるは蓋し是れ潔めを得るの途なり。

四　聖書によれば、清淨心の證據は何ぞや。

五　潔き手とは何ぞや（詩二十四〇）

第十四章　聖潔

『爾曹を召し給ふ聖者に效て凡の行を潔くすべし、そは錄して我潔ければ爾曹も潔くすべしと有ばなり』――彼前一〇十五、十六

『爾曹は神に由てキリストイエスに在りイエスは神に立られて爾曹の聖と爲たまへり』――哥前一〇廿九

『神始より爾曹を簡び眞理を信ずる事と靈の聖を蒙ることに因て救を得しめ給へばなり』――撒後二十三〇

神の吾人を撰み吾人を召し給ひし目的は啻に救濟のみにあらず、又聖

潔――聖潔によりて救ふ――にあり。されば弱年の基督信徒は獨りキリストにありて平穏を得るをのみ望むとなく亦キリストにありて聖くなるとを其標的とせざるべからず。平穏と救とは詮する所、獨り聖潔によりて得らるゝものなり。然るを其救は只平穏を要素となすと覺悟し、聖潔を度外視するものは、何時しか嗤膂の嘆を發するとあるべし。弱年の信徒諸君乞ふ神の『汝等聖くすべし』てふ言を謹聽せよ。

さて我は何故に聖からざるべからざる乎。曰く是れ諸君を召し給ひし神は聖ければなり、而して己れと交通適合せしめんとて諸君を召し給ふものなればなり。誰か神と相等しき性質を有たずして、能く神に救はるゝとを得んや(イ)。

出十九六、利十

一〇四、九二〇、六二、七十〇

神の聖潔は、其の最大榮光なり。此の聖潔の中に其義と其愛とは、一となりて籠れるなり。神の聖潔は一切の罪を焚き盡す其熱心の猛火なり、神は之によりて罪より己れを隔離し且つ其愛の致す所他人をも愛より隔離せしめんとす。是れ『己が民の贖主となり、己が民の中に住み給ふイスラエルの聖者として』なり(ロ)。贖罪は吾人をして神に近かしめ、神の聖潔と交通せしむる爲め與へらるゝものなり。吾人若し神の聖きが如く聖からずんば到底神の愛と救に與かると能はず(ハ)。弱年の信徒諸君よ、宜しく聖きものとなるべし。而して吾人の有すべき此の聖潔とは抑も如何なるものなるや。答へて曰く、『爾曹は神に由てキリストにありキリストは神に立られて諸君の

出十五、一二、六、十四、三、五、七、九、一〇、四、二、一〇、賽五〇、同二〇、同一〇、同四〇、同五〇、何九、同一〇、賽十〇、七、來十、二、〇、十十、十十、十十

哥前一〇、二、弗五、二十七

聖となれり』。キリストは諸君の聖きなり、諸君の裏にあるキリストの生命は即ち諸君の聖なり(二)。諸君はキリストにありて聖められる。諸君は聖しされど諸君は尚はキリストにありて聖められざるべからず、キリストの榮光は諸君の全生活に透入せざるべからず。

水後七〇、一、弗五

聖潔は清淨よりも優れるものなり。吾人は聖書に於て潔めば聖潔の前にあるを知る(水)。潔めとは邪なるものを除き、罪より脱離せしむるとなり。聖潔とは善且つ神聖なるものを以て滿たしイエスの性質を以て滿たすとなり。換言すれば、キリストに適合する是れ即ち聖潔なり。世の俗腸を捨て、聖なる神の御前にある念に滿たさる、是れ即ち聖なり。神の幕屋の聖なるは、神その中に住み給へばなり、吾人の聖なるも亦神吾人を

二十一、提後二〇、二十

殿として吾人の中に住み給ふによる。吾人の中にあるキリストの生命は即ち是れ吾人の聖なり(へ)。

出二十九、〇、四十、三、五、哥前、同三〇、二十、六、十七、同六、〇十、九

而して吾人は如何にせば聖潔となるべきか。曰く聖靈の聖めに由らざるべからず。神の靈は聖靈と稱せらる、是れ吾人を聖からしむればなり。聖靈は吾人にキリストを啓示し、キリストの榮光を顯はせり。聖靈によりてキリスト吾人の裏に住み、其聖なる力、吾人の中に運動す。此の聖靈によりて肉の働きは壓服せられ、而して神吾人の裏に働きて志を立て、事を行はしめ給ふ(ト)。

羅一〇、四、同八、二、十三、彼前一〇、二

而して今聖靈によりてキリストの此聖潔を受くるには、吾人は果して如何なる事を爲さゝるべからざる乎。『神は爾曹を簡び眞理を信ずる事

撒後二〇十三、

と靈の潔めを蒙る事に由て救ひ給へり」(チ)之に由て是を觀れば、キリストの聖潔は信仰に由りて吾人の有となる、此に自然の勢として第一に無かるべからざるものは聖とならんとするの志望なり。吾人は肉と靈の一切の汚れを告白し、之を神の御手に委ね、之を血もて洗ひ、以て己れを潔めざるべからず、斯くて後吾人は初めて完全に聖きを得(リ)。又第二

哥後七〇一

約一〇十四、十六、哥前九十二〇

にキリストは吾人の聖なりとの眞理を信じ、豫ねて吾人の爲め其中に備へられたるものをキリストより受領拜戴せざるべからず(ヌ)。キリストは吾人の稱義なるが故に、亦吾人の完全唯一の聖なり、キリストは神の聖意を喜ばせ奉る爲め、吾人の中にありて實際に有力に働き給ふべし、是れ共に吾人の深く確信せざるべからざる所とす。吾人は此の信仰に由りて初めて聖潔となるに充分の力を具ふべきを知らざるべからず、又吾人の事業は日々信仰によりてキリストより此の力を受くべきものなるを知らざるべからず(ル)。キリストは其靈即ち聖靈を吾人に與へ給ふ。聖靈は吾人に付與するにイエスの聖き生命を以てす。

加二〇二、弗二〇一、十、腓二〇十、同四十三、賽六〇三、默四〇八、同五十三、四、〇

弱年の信徒諸君、三一の神は三の聖者なり(ヲ)。而して此の三一の神は諸君を聖むるの神なり。即ち父の神は諸君にイエスを授け、諸君にイエスを確信せしめて之を聖め、子なる神は自ら諸君の聖となり、諸君に聖靈を與へて之を聖め、聖靈は子の神を諸君に啓示し、諸君をして神の宿り給ひ又子の宿り給ふべき殿たるに相應しきものたらしめて之を聖む。嗚呼、聖者となれ、神は聖ければなり。

主なる神イスラエルの聖者よ主は御子を與へて我儕の潔となし彼に由て我儕を潔め給ひし御恩寵を深く感謝し奉る又潔の聖靈を我儕の衷に宿らしめ之を以てイエスの聖德を賦與し給ふ御恩寵を感謝し奉る　主よ願はくは明かに此理を覺り之を實驗せんことを希ふ心を授け給はんことを　アーメン

一　罪の赦しと罪の潔めとの區別如何、又罪の潔めと聖潔との區別如何。

二　神殿を聖所たらしむるものは何ぞや。曰く神の宿在なり。吾人を聖くするものは何ぞや、曰くキリストに於ける神、聖靈によりて吾人に宿り給ふとに外ならず。從順と清淨は聖潔に至るの途にして、聖潔其れ自らは、一段高尚のものなり。

三　以賽亞書五十七章十七に聖くなるべき人物の記事あり。其人物とは心貧しく、謙なる生涯を送りながらも自ら己れの數ふるに足らざるを認め神に近づき神に居らんとを求むる人是れなり。

四　主の外に一人も聖きものなし。故に神を心の裏に有つこと多きに從ひ、其聖き事も亦大なり。

五　聖てふ語は、聖書の中意味最も深遠なる語の一にして、亦神の最も深遠なる秘義なり。諸君は其幾分を解し、亦幾分を獲得せんと欲するか、曰く然らば『我は聖し』爾曹は聖くなる可し』てふ二の事

を考へ、之を生命ある神の種子として諸君の心に保有せよ。

六　聖徒の忍耐と、聖潔による忍耐との關係如何。

第十五章　正義

『人よ彼さきに善事の何なるを汝に告たりエホバの汝に要め給ふ事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神と共に歩む事ならずや』

―米六〇八

『死より甦りし者の如く己を神に獻げまた肢體を義の器となして神に事ふべし罪より釋され義の僕となればなり今また其肢體をさゝげ義の僕となりて聖潔に至るべし』―羅六〇十三、十八、十九、

米迦の言は神の救の結果の主として三の事に現はるゝを吾人に教ふ。

新たなる生活は、神と神の意思に對しては義と義の行を以て其特質とせざるべからず。人に對しては仁愛慈善を以て其特質とせざるべからず。己れ自らに對しては謙遜退讓を其特質とせざるべからず。吾人乞ふ今正義に就て講究する所あらん、

聖書は神の前に一人も義しきものなく又一人も神の前に立つに差支なき義を有せざるとを吾人に教ふ(イ)。又人は價なしに義即ちキリストの義を受くるとを吾人に教ふ。又此の信仰によりて受けたる義により、神の前に義とせらるれば(ロ)。初めて神と並び立つを得るとを吾人に教ふ。神の此の義なる宣告は、必ず影響を人に及ぼすものにて、義の生命之によりて人に移植せられ、此人義人として生活するを得べく、又義の行を爲し得るに至る(ハ)。神と並び立つを得るに至れば即ち以て義を行ふとを得『義人は信仰に由りて生ん』即ち是れ義なる生活なり。

余は恐る、此理の常に了解せられずしてあるとを。人往々にして生活上品行上正義を守るとより却て稱義の一點に重きを置くとあり。乞ふ今吾人をして神の聖意の存する所を了解する爲め、聊か此點に就て聖書の教を研究せしめよ。若し然らんには、苟も神の正義を衣たる人は、また神の正義にありて神と人の前を歩むべきものなるを悟らずんばあらず。

試みに思へ、聖書の中には、神の僕たるもの、如何ばかり其正義を稱贊せられたるかを(ニ)。又如何ばかり神の恩寵と祝福義人に申し渡されたる

イ 詩十三、十四　同百四十三　ロ 羅三、二十、二十二、二十四、同十、三十、哥前　ハ 羅一、二　ニ 創四、〇九、同七

一、〇十、三　哥後二十五、〇一、加二十六、〇　腓三、九　羅五、〇十七、十八、同六、十三、十八、十九、同八、〇三、多一、同二、八、〇十二、約壹二、〇二十九、同三、〇十、九

一〇、太十一、一〇、九、路一同十、二〇、六、二、彼後、七、二五、〇、二、詩六、十、一、同四、三、〇、五、同〇、十、四、五十、六、二、十、七、同〇、十三、同三、〇、十九、十、二、〇、同〇、十九、十、七、百、八、四、一、十、七、同六、

かを(ホ)。又義人は如何ばかり信仰と喜樂の召を受くるかを(ヘ)。殊に詩篇を繙きて之を見よ。又箴言の中には僅かに其の一章中にすら義人の上に申し渡されたる祝福の如何ばかり行き屆けるかを見よ(ト)。又何れの處にも人を分ちて義と不義との二階級に分たれたるを見よ(チ)。請ふ又新約全書に於ては主イエス如何ばかり此の正義を必要とし給ふかを見よ(リ)。又信仰によりて義とせらるゝの教義を最も多く說きたるパウロ其人にして、尙且つ義人となり、義を行ふものとなるとを稱義の目的なりと主張したるを見よ(ヌ)。又ヨハネが正義を重んじ、其仁愛と共に神の子の必ず具備せざるべからざる二特質を說きたるを見よ(ル)。諸君若し以上の悉皆の事實を併せ考へられなば萬事に於て義を行ひ神の義しきが如く義しからんとを期する人にして初めて眞正の信徒と稱せらるべきを極めて明了に解知すべきなり。

又此の正義とは如何なるものなるかは、聖書之を諸君に教ふべし是れ行住坐臥何事をなすにも、神の誡命に適へる生活をいふ。義人は神の眼より見て義しきとをなす(チ)。義人は必ずしも、人間行爲の規則を探らず、必ずしも人の見る正不正を標準とするとなし。義人は神と幷び立てる人として、神と共に正しく歩む人として、微々たる不義も悚然として之を恐る。義人は自己に偏し自己の利益の爲めに他人を損害せんとを恐るゝと甚だし。義人は事の大小を論ぜず聖書を以て其尺度となし繩墨となす。義人は神の知己として正義の途は祝福生命喜樂の途なるを知

詩三十二、一、同三十一、八、同〇、十三、同〇、十、四、六、十一、八、同〇、九、十、七、二、十、六、十、二、詩五、〇、三、六、十、七、一、十、二、十、一、廿、二、廿、八、五、四、一、十、六、傳三、〇、十七、賽三、

る。

諸君よ尙ほ進んで神の義人に與へ給ふべき祝福と喜樂の約束を考一考あれ、而して後、神と相親み信仰に由りて神の子の正義を衣、義を行ふの外、亦他になすべきなきの人として此世を送れ。

われは義をおこなひ救をほどこす神にして我のほかに神あることなしと詔ひし主よ主は義をおこなひ給ふ神に在すが故に救濟を施し御子に由て我を救ひ給へり　主は義をおこなひ給ふ神に在すが故に我をも義き者となし義人は信仰に由て生べしと詔へり

オー主よ願はくは我衷なる新しき生命をして信仰の生涯となし義人の生命となし給はんことを　アーメン

一　羅馬書六章十九と廿二の兩節に『今また其肢體を獻げ義の僕となりて聖潔に至るべし』てふ語と『神の僕となりたれば聖潔に至るの果を得たり』てふ語あり、諸君、此義を行ふとと、聖潔との關係を考察あれ。義を行ふも、即ち品行動作の正義は、是聖潔に至るの途なり、又從順は聖靈に滿さるゝの階梯なり、亦神が聖靈によりて吾人に宿り給ふも、是れ即ち聖潔なり。

二　『暫時許せ如此凡て義き事は我傳靈す可きなり』こは主イエス聖靈のパプテスマを受け給へる時、吐き給へる言なり。吾人乞ふ、圓滿なる從順をなすを妨ぐる一切の誘惑を排除し、以てキリストに倣

ふことを期せん。左すれば吾人も亦聖靈を以て滿さるべし。『饑渴の如く義を慕ふ者は福なり』。

三　諸君『義』てふ名を冠せしむるに差支なき人物の肖像を其眼前に掲、ぐるの勞を惜むなかれ。宜しく其廉直を欽慕し其小心翼々他に小害をさへ及ぼすを恐れしを思ひ、其敬虔細心神の命令を欠なく守りしに鑑み其の潔白純正、神の訓誡命令を率體したることを臆念し、然る後ち主に告くべし、我も亦乞ふらくは斯くの如き生涯を送らんと。

四　此に於て乎、諸君は『義人は信仰に由て生くべし』てふ大文字の眞意を解せらるべし、信仰に由る時は、神を敬はさりしものも義させられて義人となるべく、信仰に由る時は神を敬はさりしもの亦義人の生涯を送るを得るなり。

第十六章　愛

『われ新しき誡を爾曹に予ふ即ち爾曹相愛すべしとの是なり我なんぢらを愛するが如く爾曹相愛すべし爾曹もし相愛せば之れに由て爾曹我弟子なる事を知らん』――約十三〇卅四、卅五

『愛は隣を害はず是故に愛は律法を完全す』――羅十三〇十

『愛する者よ此の如く神われを愛し給へば我儕も亦互に相愛すべし未だ神を見し者なし我儕もし互に相愛せば神われらの裏に居て彼を愛する愛を我儕の裏に完全す』――約壹四〇十一、十二

前章に引用せし米迦の言によれば、神の需め給ふものは正義第一、慈悲を愛すること第二なり。正義は舊約書に於ては前面に位置を占め新約書に於ては、其愛を重しとすると一見して知るべし。今此の論證を求むれば之を發見する、決して難しとせず。さて神の愛の初めて啓示せられ新しき永遠の生命初めて與へられ、吾人々類天父の子となり、相互に同胞たるに至りたるは、一に是れキリストの降誕に由る。此の理由なるが故に主にして初めて新しき誡命即ち兄弟相愛の誡命を垂るゝを得たり、されど正義を重んずるとは新約と舊約の間毫も優劣なし(イ)。只舊約になくして新約にあるものは舊約時代には行ふを得ざりし愛に對し、吾人が能力を與へられしと是れなり(ロ)。

(イ) 太五〇、六十七、二十同、六〇三十三

(ロ) 羅五、加五〇

凡ての信徒諸君願はくは深く心に記せよ、イエスが此世を去らんとするに當りて弟子等に與へ給ひし新しき誡命は兄弟相愛するを弟子たるものゝ特質とすべしといふことなりき。是れ第一にして大なる誡なり。諸君願はくは其全心を盡して己れをキリストに献げ以て其誡命を遵奉せよ。此の兄弟相愛を正しく運用するため、信者は特別の注意なかるべからざるなり。

○廿二、撒前六〇
九、約壹十
四〇
一、同十
三〇、三十
四、

兄弟を愛するの愛は天父を愛するの愛より來る。聖靈によりて、神の愛は吾人の心に濺かれ、天父の驚くべき愛は吾人に開闡せらる。されば神の愛の吾人の靈魂の生命となり、喜樂となるは即ち之が爲なり。神の此の吾人に對するの愛、其源となりて、吾人が神に對するの愛流れ出づ(一)。

羅五〇一、
約壹四〇
十九、

又吾人が神に對するの愛は自ら兄弟に對するの愛となる(二)。果して然らば、諸君兄弟相愛の誡命を遂げんとするに、決して自己の力を恃むなかれ、諸君は獨力之を遂げ得る地位に居るものにあらざるなり。諸君只信ぜよ、諸君の裏にありて神の愛を諸君に知らしめ給ひし聖靈は、亦確かに諸君に此愛を與ふるを得給ふとを。諸君言ふ事を止めよ、我は自ら愛を感ぜずと、又言ふ事を止めよ、我は此人を赦すとを得るものとも感ぜずと。感情は義務の規則にはあらず、義務の規則は神の誡命なり、吾人若し信仰あらんには、神は此の誡命に從ふの力を賦與し給ふなり。されば諸君意思の撰ぶかまに〳〵神に從順し、聖靈が諸君に賦與したる信仰により、而して言ふべし、『我れ此人を愛せん』『我れ此人を愛す』と。感情

二、弗四〇
二、六、同
五〇、一、
約壹
二、三〇、一、
同四〇
七、二十、
同五〇、

は信仰に追隨し、恩寵は天父が諸君に要求する一切の力を與ふるとと知れ(ホ)。

兄弟の愛はイエスの愛を尺度とし、規則とす。『我爾を愛したるが如く爾曹も亦互に相愛すべし是れ我誡なり』と(ヘ)。吾人の中に活動する永生は是れイエスの生命なり此の生命は吾人がイエスに於て見る生命と同一の規則を守るを知る、亦他を知らざるなり。此の生命は其イエスに於て活動する力の儘にて吾人の裏に活動す。イエス自らは吾人にありて生き、吾人にありて愛し、吾人によりて愛す。故に吾人は吾人にある此の愛の力を信せざるべからず、又此の信仰によりてイエスの愛せしが如くに愛せざるべからず。諸君願はくは、イエスの愛し給ひしが如く愛す

ホ 太五〇四　十四、十五　十二、二〇　十三、十二、撒前二加　十四、同五〇二　三、二、十〇三、十前　四、十〇四、腓十　三、〇一、彼二十前　二、路廿二〇　七、廿六、約十廿　三、四、十五、廿四、十四

るとを期して愛するは即ち眞の救なるとを信せよ。

兄弟の愛は眞實忠誠ならざるべからず(ト)。此愛は單の感情にあらず、愛に由りて行く信仰は其力の根抵をキリストに有するものなり。此愛は神の言によりて列擧せられたる諸の性質中に顯はれたり。乞ふ先づ哥前十三〇四——七の光榮ある映像を熟思せよ。忍耐と慈悲と良心に對する一切の奬勵に着目せよ(チ)。諸君の一擧一動にキリストの愛諸君の中に存するとを發露せよ。諸君の愛をしてイエスの愛の如くに利他的、献身的の愛ならしめよ。如何ほど罪深く、如何ほど邪惡なるものに對するも之を神の子として熱心に親愛せよ。諸君が神の子に對するの愛を博くして之を衆に及ぼせ(リ)。諸君、其家族に對するも、其教會に對するも、

ト 太二十二、十二　十三、十四　十五、同廿五〇　十七、哥前十　十八、三〇　十九、加五〇　二〇、六、雅十　二一、五十六、壹三〇　二二、十六、約十六、十八、十　二三、加五〇二　二四、十二、弗　二五、三十二、腓二〇　二六、二三、二十四　二七、撒前三

路六、三
十二、〇
ト五、三
前十一、二
後七、一、〇
彼二、〇

其世上に對するも、『最も大なるものは愛なり』との一事、を身を以て代表し、又神の愛諸君に充ちて足らざるなく、諸君に働きて滯滯なきとを示すべし。

信徒諸君神は愛なり。イエスは此愛の賜物にして、諸君に與ふるに愛を以てし、諸君を移して神の如き愛の生命に達せしむるものなり。諸君此の信仰に住せよ、果して然らんには諸君また我に愛するの力なしと嘆ずるに及はざるべし、是れ聖靈の愛、諸君の能力となり、諸君の生命となるべければなり。

最も愛し奉る救主よ新しき生命は愛の生命なることを彌悟り奉る

主は神の愛し給ふ御子神の愛の賜物に在して我儕も神の愛に導き愛の中に宿らしめ聖靈を授けて神の愛を我儕の心に灌ぎ愛の泉を我儕の心に開き神に對し兄弟に對し凡の人々に對して愛の水を流れしめ給ふ

主よ愛の爲めに生き又此力に由て凡の人を愛せんが爲めに愛に由て贖はれし我は此所にあり　アーメン

一　神を信せざる人は往々にしていふ、吾人若し愛を有せば、信仰は即ち要あるとなし、故に此人々は愛を以て其救の一條件とす。正統教徒亦此論に反對するの熱心より、往々にして信仰稱義の教理

を提出し、寇がら愛を以て甚だ大切ならざる如くに說く。是れ極めて危險のもとゞもと言はざるべからず。夫れ神は愛なり、神の子は神の愛の賜物なり、吾人に神の愛を送り屆くるものなり。聖靈は吾人の心に神の愛を灌ぐものなり。新しき生活とは愛にある生活なり。愛は最も大いなるものなり。乞ふ愛を以て吾人の生活の要素たらしめよ、神の誡命を守るによりて知らるゝ眞正の愛を以て吾人の生活の要素たらしめよ（約壹三〇十、廿三、廿四、同五〇二を見よ）。

二　諸君若し僅かの愛をだも感ぜずとも、尙ほ且つ愛せざるべからずとの余の言を怪むなかれ。諸君の力は感情にあらずして意思なり。諸君の裏なる聖靈は取りも直さず、神の諸君に命じたる一切の事を爲さしむる諸君が意思の力なりとは、是れ感情によるとにあらず、蓋し信仰に由るとなり。此を以て諸君たさひ、敵を愛するの念を秋毫だも感ずるとなしとするも、宜しく其の信仰の命のまに〳〵いふべし、父よ我れ此人を愛す、我が心にある聖靈の隱れたる働きを信じて我れ此人を愛すと。

三　諸君は何人に對しても害意あるとなく、或は必要に迫れる人に對して救恤の念を動かすとありとも、之を以て愛なりと思ふなかれ。愛はかゝる輕々しきものにあらで、愛は即ち愛なり。愛とは諸君が神の敵たりし時に神が諸君を召し給ひ、而して後ちに溫厚親愛の念極まる所、暫しも安處する能はずして諸君を祝福したる其性質をいふ

第十七章　謙遜

『エホバの汝に要め給ふこゝろは唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神と共に歩む事ならずや』―米迦六、〇八、

『我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負ひて我に學べ汝等心に平和を獲べし』―太十一、〇二十九

弱年信徒の警戒せざるべからざる最も危険の敵其數多し、驕傲即ち自慢は其の一なり。凡そ其の運動の狡猾にして且つ隠密なる罪悪亦之れに如くものなし。其猾智に長ずるや、事毎に之に侵入するの途を知らざるなく、吾人が神を禮拝し、祈禱を捧ぐるとにさへ干渉し、又謙遜の美徳をすら紊亂するの妙術あり。吾人は思ふ自慢にして若し其力を養ふべき道を知らざるほどの生涯は、世より見れば微賤言ふに足らざるものなれど、若し靈性上よりいへば、聖高寛に貴ぶべきものなりと(イ)。果して然らば信者たるもの、常に自慢の侵入を防衛せざるべからず、聖書の之に關する教訓を謹聽せざるべからず、而して亦能く之を放逐すべき謙遜に就ての聖書の教訓を遵奉せざるべからず。

抑も人は神と其榮光を共にすべきやうに創造せられたるものなり。人若し神の榮光のために己れを捨てなば即ち此の榮光を得らるべし。又神の榮光我にありて顯はれんことを望めば望むほど、此の榮光は益々其

代下六〇五二十
十六十二、
三十六一十、
三十十六、
二、
三、
三、
三

人の上に宿るに至るべし(ロ)。又神の外に何物をも求めず、神の榮光をのみ是れ願ひ、愈々己れを忘れ、愈々己れを捨つる時は、其人は益々福なるべきなり。

然るに此の計畫は罪に由りて顚倒せられたり。人は唯己が榮利をのみ是れ求め、己が意思にのみ是れ從ふに至れり(ハ)。此時に當りて恩寵は罪の毀損せし所を修覆し、人をして己れを捨て、只神の榮光の爲めに活くるの榮位に歸らしめんとて、即ち此世に來れり。是れ他なし、謙遜なり、卑下なり、イエス即ち之が摸範者たり。イエスは一毫己れの利を思はず、天父の榮光の爲めに一切己れを献げ給へり(ニ)。

自慢を除却せんと欲するの人は、只自慢の働きを止むるを以て得たり

ロ 賽四十三、七、二、一、約二、一〇、二、一〇、八、十三、一〇、三、同三、一、十二、七、四、一〇、哥前十五、一、撒後十三、一、一、十一、一、羅一、一、一〇、二、約八、一〇、五、腓十七、二、一〇、七

とするは不可なり、然り、驕傲は謙遜によりて之を驅逐し、之を攻め出さるべからず。キリストにある生命の聖靈と、キリストの謙遜の聖靈とは、即ち吾人が眞正の謙遜を全ふするものなり(ホ)。

イエスが此の目的の爲めに主として用ゐ給ふ手段は道即ち是れなり。吾人が罪より潔めらるゝも亦此の道に由りてなり。吾人が神の愛に聖せられ、且之れに滿たさるゝも亦此の道に由りてなり。

此點に就て道のいふ所を少しく觀察せられよ。道は神の驕傲を惡ませ給ふと、又驕傲には必ず其の應報あるべきとを語る(ヘ)。道は謙遜の人に最も榮光ある約束を結ぶ(ト)。使徒等の書翰は、殆んど皆、キリスト教徒の具備すべき美德の一なりとして之を推薦せざるなし(チ)謙遜はイエス

羅八、二〇、五、腓二　詩三一、二一、一〇、四、六、箴一一、一〇、五、太二、十三、一〇、二、路一、一〇、五

十一、雅四〇六、彼前五〇五、詩三十四〇十九、箴一十二、賽一五〇十七、路九十五、同十四〇八、同十四〇四、羅十二〇三、哥前十三、加四〇五、廿六〇二、弗四二〇二、腓四三〇

が其の弟子に印象せんとを熱望し給ひし其肖像の一面なり。謙遜はキリストの降生と、其贖罪の根抵なり(リ)、

諸君願くは常住不斷に、以上の神の言に思ひを凝らし、且之を其心に貯ふべし。人生の樹は、種々雜多の種を結ぶ奇木にして、天木の種たる謙遜も亦實に其一なり。所謂る種とは即ち神の言なり。諸君之を其心に蒔かば、時至り、芽出で、果を結ばん(ヌ)。

之に加ふるに、謙遜は如何ばかり麗はしく、如何ばかり愛らしく、如何ばかり神の聖意に適ふかを思ひ見よ。諸君は神の榮譽の爲めに創造せられる人としては、謙遜に由りて初めて此任を全ふせらるゝを見ん(ル)、亦眞實何の價値もなき罪人としては、固とより此の謙遜を輕々に附し

三、二〇十太二十二、二十六、路二十八、二十一、七〇、約十四、三十五、腓四、二十八、撒前二〇七、來十三、四〇、雅一十二、二、廿一、創一〇廿、詩前十七、一〇、伯十一〇六、賽六路五〇

去るべき理由あることなし(ヲ)本來の我れ死せずんば、新生活に達するを得ざるを知れる贖はれしものとしても亦謙遜の忽諸にすべからざるを見ん(ワ)。天父の愛に掩護せらるゝ神の子としても亦謙遜を以て何物の上にも置かざるべからず(カ)。

恩寵の生涯に於ては、何れに愚かはあらざれども願はくは、此の謙遜に於ても、亦信仰を以て其の第一事とせよ。諸君の中に活動する永生の力を信ぜよ。諸君の生命たるイエスの力を信ぜよ、諸君の中に宿り給ふ聖靈の力を信ぜよ。諸君其自力を以て己が驕傲を隱蔽し、若しくは之を忘却し、若しくは之を根絶せんとすると勿れ。キリストの血は能く罪を潔め、聖靈亦之を潔むべきを確信し宜しく己れの罪を、自ら知れるたけの

罪の所爲を告白せよ。心柔和にして謙るものなりしイエスに倣へ。イエスは諸君の生命にして其有ち給ふものは皆諸君のものなるを覺悟せよ。イエスは諸君に其の謙遜を與へ給ふとを信ぜよ。『之を主イエスにせよ』てふ語は、即ち是れ『主イエスを衣よ』てふ意なり。諸君主イエスを衣るを得んが爲めに謙遜を衣よ。謙遜を諸君の中に滿たしむるものは、諸君の裏に在すキリストなり。

五〇八
羅七〇十
八、五哥前
十、〇九
〇二十加
二、二
創三十二
〇十母
後七〇十
八、〇前
五〇十彼
一前

恩寵深き主なるイエスよ人の子の間に未だ主の如く高く主の如く聖く主の如く榮光あるものあらざりき然るに又主の如く己を卑くし甘じて凡の人の僕となりし者あらざりき

オー主よ主の榮光に與り得る恩寵は謙遜にあること何時悟り得べきや　願はくは我に此の理を識らしめ給はんことを　アーメン

一　他人の驕傲心を增長するが如きとは、一切之を爲さゞるに注意せよ。又他人をして諸君の驕傲心を增長せしむるが如きとをなさゞる樣注意せよ。取り別け、自ら己が驕傲心を增長せしむるが如きとをなさゞるやう注意せよ。何れの時、如何なる事を問はず、只神にのみ其榮を歸せよ。勉めて神の諸子に益ある萬事に注意し、又之に就て熱心神に感謝せよ。其敵の送りたるさ、味方の送りたるさを問はず諸君をして謙遜ならしむるほどのものには、凡て之に感謝せよ。殊に當然我が受くべからざるの名譽に執着するとなからんと

を決心せよ。之を天父に獻げ奉れ天父の名譽をのみ是れ注意せよ。

二　膠病若しくは疑惑を謙遜と誤認するとあるなかれ。眞實なる謙遜と強盛なる信仰は雨々相并行す『主よ我なんぢを我が屋の下に入れ奉るは恐れ多し』と言ひし百夫の長と『主よ犬もその主人の膳より落る屑を食ふなり』と言ひし婦人さほ、即ち是れ主の遭遇し給ひつる最も謙遜に、最も信仰強き人々にあらずや(太八〇十と同十五〇二十八を見よ)。此の理由如何といふに、大凡そ吾人神に近づけば近づくほど、益己れが卑賤のものなるを感ト、且益神にありて強きものとなる。又我神を見奉れば見奉る程、我は愈微弱のものとなり、神を信ずるの信仰益深くならんとす。されば諸君若し謙遜ならんと欲せば、宜しく心も目も悉く神に溺たさるべし。神若し諸君の

凡たらば、人を容るべき時間と場處は一毫存するとなるべし。

第十八章　躓礙

『われらは昔しばゝ怨を爲る者なり』――雅三〇二

以上神が雅各をして語らしめ給ひし言は、人の神恩に守られざる時の狀態なり、是れ信者といへども尚ほ其數に漏れざるものとす、夫れ慾躓礙(ロ)は吾人の悉皆の望を覆ひ去るものなり(イ)。『爾曹を躓かせじと保り給ふ神……榮と威光と大能と權能を永久に有ち給ふなり』(猶太書二十四、二十五)。此の猶太をして語らしめ給ひし神の言は、神能く吾人の失敗蹉跌を防ぐことを示し、且つ名譽と權能を神に歸し奉るやう吾人の靈魂を鼓舞したるものなり。是れ以て吾人の神に於ける望みを擔保するに足る(ロ)。『兄弟よ勤て爾曹の召されし事と選まれし事とを堅固くせよ若し前に告たる事どもを行はゞ爾曹いつまでも躓く事莫らん』(彼後一〇十)此のペテロをして語らしめ給ひし神の言は、吾人が全能者の保護に與ることを得る方法を敎へたるものなり、換言すれば、吾人が神に選まれ、神の如き生涯を送ることを得るとの保證なり(彼後一〇四、八、十一を見よ)。是れ以て吾人を勇猛精進ならしむるに足る(ハ)。

弱年諸君にありては、躓礙を如何樣に考ふべきやといふと、往々一個の難問たることあり。此點に關しては弱年信徒たるもの、特に二個の誤謬に陷らざる樣注意せざるべからず。或人は一たび躓けば直ちに其の元氣

を失ふ、而して謂へらく、我が捨己は眞摯ならざりき、而して我れ神に對する信仰を失へりと(二)。之に反して或る一種の人は、餘り躓礙を輕視し、而して謂へらく是れ止むを得ざるとなりと。此人躓礙に就て殆んど煩ひ思ふ所なく、又恬として之を改むることもなし(ホ)。乞ふ吾人をして此等の神の昔に基き聊か吾人が躓礙に就ての心得を學ばしめよ。之に就て三の學ぶべき點あり。

躓礙の爲めに元氣を沮喪する勿れ。諸君の召されたるは即ち完全に至るべき爲めなり。されど此の完全は一朝一夕に來るものにあらず、之が爲めには時日と忍耐共に必要なり。此の故に雅各言へることあり『爾曹全く且つ備はりて缺くる所なからん爲めに忍耐をし、全く働かしめ

よ』(ヘ)。(原譯者曰く、和蘭譯の聖書に曰く『爾曹全く且つ圓滿に眞摯ならん爲めに忍耐をして全く働かしめよ』と)。諸君其の捨己が眞摯ならざりしと嘆ずるを止めよ。只我が尙ほ如何ばかり弱きものなるかを自認せよ。又何時までも躓かざるべからざるものと思ふを止めよ、只如何ばかり救主の强きものなるかを自認せよ。

躓礙をして全能の保護者を信ずるの階段たらしめよ。諸君の躓けるは充分の信仰を以て神に依り恃まざりしが爲めなり(ト)。諸君躓礙に驅られて愈〻神に近づくべし、諸君若し躓くことあらば、先づ第一になすべきことは他なし、之を携へてイエスに至るにあり。諸君宜しく之をイエスに告げ奉るべし(チ)。之を告白して赦免を受くべし。之を告白して其

弱きまゝに身をイエスに托し、其己れを守り給ふべきを信ぜよ、又絶へず歌ふていへ『爾曹を保つに力ある主に榮光あれ』と。詩三十八、同六十八、約九、壹、一、同二〇、九、一〇、詩二十八、二十四、二十、二、一、彼前十、七、十、八、代下廿、五、十、八、三、十三、詩

最後に躓礙をして諸君を極めて謹慎ならしむるものとせよ(リ)。諸君は信仰によりて勵み、信仰によりて勝を得るものなり、諸君は其保護者の力により、其の御助けの喜樂と保證により、謹慎ずるの勇氣を有するものなり。諸君若し其辨別力を確かにすればするほど、神が諸君を選び給ひて、決して諸君を捨て給はずとの確信愈〻強く又何事も神の爲めにし、神に在てし、神に由りてするの信仰愈〻篤かるべし(ヌ)。神の言はいふ、汝等斯くの如くせば、決して躓くことなしと。

主なるイエスよ常に躓き易き罪人なる我は我儕を守て躓かしめ給はざる主に榮光を歸し來る　權能も權威も主のものなり　我は主を我が守主と仰ぎ奉る　我は我を撰み給ひし主の愛を思ひ汝は躓くことなしと詔ひし聖語の成就せらるゝ時を待望む　アーメン

一　諸君、神の恩寵果して我に何を爲し得るかを知らんと欲せば、一に之を神の言に就て窺ふべし。吾人が自然の預期――即ち吾人は常に必ず躓かざるべからざるものと思ふと――は誤謬なり。然るに此の預期たる、樣々の事情相綜合して牢固抜くべからざるものとなるとあり、愼むべきとなり、そは即ち他なし、一切萬事己れを捨

つと言ひながらも、心の底に尙ほ幾分の未練あるを多くの懶惰なる信者の失敗を往々目擊すると、神眞に吾人を守り給ふといふとを尙ほ全く氷解せざる點あるを、自力を盡して勵み、それが爲め、樣々なる失敗に陷ゐりしと。

二

如何なる躊躇も之を事眼小なりとして等閑に付するとなかれ。

第十九章　保護者たるイエス

『エホバは汝をまもる者なり……エホバはなんぢを守りてもろ〳〵の禍害をまぬかれしめ亦なんぢの靈魂を守り給はん』詩百廿一〇四、七、『われ我が信ずる者を知りかつ我之れに託したる者を彼かの日に至るまで守ることを爲得るを信ずればなり』――提後一〇十二、

其信仰の尙ほ微弱なる弱年信徒に取りて最も必要の課程とし言はゞ蓋し主は我を受け給ひしのみならず、亦我を守り給ふべしといふとに過ぎざるはなし(イ)。若し夫れ此の目的を達せんと欲せば、エホバは汝を

まもる者なり』でふ愛すべき名目を心肝に銘じ、其の全能者の保護を確信するの堅固なる使徒パウロと優劣あるとなく、以てパウロと共に『われ我が信ずる者を知りかつ我之れに託じたる者を彼日に至るまで守る事を爲し得るを信ず』と光榮ある語を口にするに至らざるべからず來れ諸君聊かパウロより學ぶ所あらん。(原譯者曰く『和蘭譯の聖書に曰く、我之れに託したる抵當』と)

諸君パウロに倣ひて其の抵當をイエスに託せよ。パウロは身躰も靈魂も擧げて之を主イエスに献げたり。之を主に託したるは蓋しパウロの抵當なりしなり。成程諸君も亦主に其一身を献げられたり。されどこは日々守られんが爲めなるを明白に了解しての上にはあらざるべし。但し。諸君今日以後改めて日々之をなすべし。諸君其靈魂を貴重の抵當として之をイエスに託し、以て其保管に任せよ。靈魂にも限らず。諸君の凡てのものをイエスに委託せよ。諸君は果して自ら適當に制御する能はざるものを有するかたゞへば其心は余りに世俗的に(ロ)、其舌は余りに懶惰に(ハ)、其性質は余りに感情的に(ニ)。主を告白せんとして其信仰余りに弱く(ホ)、爲めに何事も意の如くならざるの弊あるか。果して然らば、諸君之を抵當としてイエスの保護の下に託することを努めよ。イエス即ち之に就ての神の約束を諸君に成就し給ふべきなり。諸君は往々にして罪の爲めに過度に祈り、過度に勵みながら却て何等の効をだも得ざるとあり、是れ蓋し神の助けを假りてするものなれども自ら勝利の當人

たらんとを希ふが爲めに外ならず。是れ甚だ然るべからず。宜しく事を擧けて全然イエスに一任せよ。『戰は汝らの戰にあらず、エホバの戰なり』(ヘ)。之をイエスの手に委ねよ、イエスの諸君に代りてなし給ふべきを信ぜよ。『諸君をして世に勝たしたるものは諸君の信なり』(ト)。されど諸君は第一に何事も皆己が手を離して之をイエスの手中に置かざるべからず。

六、七、撒後三〇十六、一〇七、耶一一〇〇九、太十九、二〇十、路二〇十六、十四、出十四〇申十五、三〇二十二、同二〇十四、十下三十五、代十〇太九〇二十三、約壹五〇四、十七、創十一、同七十〇

諸君バウルに倣ひて其の信仰を只イエスの力に置くべし。余は彼に託したるものを彼の守り得ることを信ず。諸君は其保護者として全能のイエスを有す。信仰はイエスの全能を信ずるに由りて初めて強し(チ)。諸君願はくは其信仰をして神が諸君の爲めになし得ることを信じて、特に之を強固にせよ(リ)。神は諸君の力の全く及ばざる榮光ある大事を諸君の爲めなし遂げ給ふべきを確かに信ぜよ。聖書を讀んで、其中に如何ばかり神の力が屢々神の民の信仰の基礎となりしかを察知せよ。亦是等の言を取りて諸君の心に藏めよ。イエスの力をして諸君の靈魂に滿たしめよ。只管に『わがイエスは我に何をなし得るや』と自問せよ。諸君が眞實イエスに依託せしものはイエス之を守ることを得給ふなり(ヌ)。バウルに倣ふて此の能力が其の抵當を保管すべしとは何れより得又たる確信なるかを講究せよ。是れ即ち其イエスを知るより得たるものに外ならず。『われ我が信ずる者を知る』故に我は確信す(ル)。諸君若しキリストの己が有なるを知り、また己が朋友としてキリストと語らはゞ庶

四、八〇三十、同廿七、廿四〇廿一、羅一〇、來十一、八、羅四〇二十一、四十四、同〇二、四、哥後八〇九、提後一〇十二、